

『ジョン・ダン入門』

―背信と野心の詩人―

ジョン・ケアリ著

朝倉秀之訳

第五章 肉 体

第四章ではダンが捉えどころのない絶対概念を追及するにまかせた。この章では現実の世界に戻りダンがそこでどんな反応をしたのかを考えなければならぬ。このことは、批評家たちがこれまで非難を込めて述べてきた主題の一つである。「ダンには自分が何かを見て楽しむなどということを決して思い浮かべないし、ほのめかすこともない」と、ルパート・ブルックは不平を言う。「ダンの詩は全て盲人世界に住む盲人が書いたにちがいない。」⁽¹⁾その指摘はJ・E・V・クロフツの見事なまでに攻撃的な論文の中で詳しく述べられている。当時の文学的慣習に対するダンの反逆精神は「並外れて詩人としての素養に欠けていたからこそ」出てきたのだと主張するのである。欠けているものの最たるものとして、クロフツ教授はダンが視覚に訴える美的感覚に欠けていることを取り上げている。「目に見える世界の美しさは、ダンにとって何の意味もなかったし、真面目に効果をあげる着想を得ることも全くなかった。」⁽²⁾

このような攻撃に反論するのに最も有益な方法は、視覚的に美しいと言われる箇所を幾つかあげてダンの詩の中を探し回ることではない。ましてや、ブルックやクロフツの批評眼を持ち上げることでもない。当然のことながらダンを軽んじることでもない。ダンがその時代を通して目に見える美しさに無関心であるとか、免疫になっているように思えるとするならば、視覚的な美しさなど、ダンの作品を論ずるには不十分な概念であり、何がそれに代わり得るのかを示さなければならぬことになる。ブルックやクロフツの言い分は、彼らが述べる限りにおいて、正しい。あるいは、正しいと言ってもよいということである。しかし、十分には述べられてはいない。ダンの詩の中で目に見える美しさが足りないことは、欠点だとは感じられない。なぜなら、目に見える美しさを締め出している別のもつと激しい苦闘の必然性があるからである。ダンが内的経験を執拗に調べたり、「色や肌を愛する人」⁽³⁾をそれなりに軽蔑することは、これらの苦闘が最も明白になっていることの表れにすぎないのである。しかし、ブルックやクロフツの見解を受け入れて、ダンに反対する事例を詳しく論ずることはむしろ役に立つであろう。なぜなら、

ダンの美的感覚が不十分であるからこそ、それに伴う独自の表現力が産まれているのだし、美的感覚が不十分なところを調査することによって、即座にこのことを高く評価することになる。正にダンに欠けているものは、氣質的に言っても対極にある同世紀の詩人トマス・トラハーンとダンと比較することで示すことができる。トラハーンはあらゆる詩人の中で描き出す世界の恍惚の喜びを感じ、讚える。『挨拶』からのこの連は典型的である。

新たに光輝く喜びよ！

それは黄金や真珠を凌ぐもの！

そのような神聖宝は少年たちの脚

そこに魂が宿る。

その脚の整った関節と青色の血管は

世界中の人々が持つ以上の

富を含んでいる。⁽⁴⁾

トラハーンがそこで主張しているのは、見ての通り、かなり明白である。子供を見て、黄金の塊りを見てごらんさい、そうすれば立ちどころにその子供の方が大いに美しく、価値あることが分かる。脚の片方、あるいは目の片方でもお金のために犠牲にすることを考えると、心が騒ぐ。トラハーンが、素晴らしく作られた（「整った」）ものとしてその子供を理解することは、ベン・ジョンソンの小さな息子についての墓碑名の中で見つけるのと同じものである。

静かに安らかに眠りたまえ、問われれば、答えてくれ。

ここにベン・ジョンソンの最良の詩眠れり、と。⁽⁵⁾

しかし、ダンにはトラハーンが描く世界を決して描くことはできなかった。子供の肉体が持つ複雑さや快活さというものを、私たちが知り得る限り、ダンには決して気づくことがなかった。同様に、トラハーンの感嘆の喜びは、突然創造主の賛美へと変わる衝動であるのだが、ダンには感じなかったものである。自分で生きているのだという感覚から生まれる爽快感も感じなかったのである。しかし、トラハーンはいつも私たちにその爽快感を共有させることができるのである。

また、ダンの中のこのような不十分さは、単に賢明で逆説的な詩を書きたいという気持ちの結果でもない。そのような詩は、他の人たちが慣習的に楽しんできたものを非難することで喝采を浴びることになるからである。もしダンが一番心を込めて本気であると見られる場所、すなわち説教集と祈禱集に立ち返るなら、ダンがこの世の美しさ、豊かさ、活気に対して全くと言っていいほどに無関心であることは、正に指摘された通りである。ダンのキリスト教は暗く、苦痛を伴うものである。トラハーンは、自著『センチュリーズ』の中で自分が栄光であり、時を超えた不思議なものとして子供時代に見た世界を思い出す。

その穀類は、光沢鮮やかで不滅の小麦だった。きっと一度も刈り入れもされず、誰が播いたのでもないのだろう。永遠から永遠に至るまでずっと倒れずにいたのだと僕は思った。その道路の埃や石が黄金みたいに宝物だった。初めはその門が世界の果てで、僕が最初に門の一つから見たとときの緑の木々は僕を誘い、うっとりさせた。その木々の甘さと並外れた美しさに僕の心は、飛び跳ね、恍惚に狂わんばかりになった。木々は

そんなにも物珍しく不思議なものだった。⁽⁶⁾

ダンが説教の中で述べているのとは対照的である。もし子供時代に心を馳せるなら、覚えていた最初のことが罪を犯したということになるのは確かである。実際のところ、生まれ出ることもなく、たとえ人間の子供が邪悪なものを押し進めることもなく母親の胎で死んでしまおうとしても、暗く残忍な生き物であることには変わりなく、地獄に相応しいものである、とダンは私たちに認識させる。「胎の中で我々は暗黒の被造物に相応しく、四六時中そこで光を奪われている。そして、その胎で残酷さを学ぶことになるのは、血によつて育てられるからであり、たとえ決して生まれることはないとしても、呪われているのだ。」人間の肉体は、ダンの記述によると「濡れた泥」「漆喰いで混ぜ合わされた塵」である。生きている間ずっと墮落することと溶けていく。私たちは「毒の箱」であり、自分を見出す世界は「毒蛇の寝床、毒矢の矢筒」である。だから「フケ、らい菌がいたるところに付着する。」人間は「あらゆる惨めさの避難所であり、大海原」であり、一時的であれ、幸福である人に対しても確率は三対一であると、ダンは計算している。私たちは生まれた日から死刑囚の身である。「我々の生命は全て、処刑の場、死への出発に過ぎない。」⁽⁷⁾

このような観点に立つと、生命は、いくら良くみても一番退屈で、一番面白くない入会儀礼ということになる。思慮深い道を取りたければ、それを避けることである。「この命に生まれること以外に救われて天国に至る何か別の道があるなら、私はこの世に出てくることを望まないであろう。」従つて、ダンは、人生を楽しむものだと思うことに価値を置かないのである。自然界の美しさをほとんど考慮

に入れていないみたいだし、美しさに全く関心がない。美しさなど神を知るのに必要な「漠然として弱い方法」に過ぎない。「健康、力強さ、偉大さ」は、人々が財産だと言うが、取るに足りない偶然の出来事である。食べたり飲んだりして楽しむことは、いくら洗練された優雅であるとしても、「高価な糞や珍しい糞便」を生み出すための金のかかる行程にすぎない。蜂蜜のような特に害のない食べ物と見えるようなものでさえ、ダンはプリニウスを根拠に「天の甘い排泄物、星の唾、小水、蜂の嘔吐物であると」述べる。⁽⁸⁾

性を楽しむことなどは、もちろん口に出すのも憚れるほどにこの世的に見ても邪悪であり、妻との関係が許される既婚の男も「妻の胸の中で姦淫者」⁽⁹⁾なのである。美しい肉体はどうかといえば、男たちの情欲を掻き立てるがゆえに、美しさなど黄金と比べて価値がないことを思い起こすべきである、とダンは言う。金の「採掘者」や「錬金術師」を獲得することは、一般的に必要なではあるが、美しさなどはいかなる努力も積むことなく生じるからである。両親がいくら一生懸命働いたり、特別な食べ物を食べたところで、美しい子供に恵まれる保証はないのである。美しさというものは何処に生まれようとも、「偶然の産物」に過ぎないのであり、結果的に言つて、本当の価値などない、とダンは結論づける。お金や一生懸命働くことと関係がないことを根拠にこのように美しさを非難することは明らかに前に引用したトラハーンの詩の連と違っている。

さて、おそらく逆のことになるのだろうか、私がダンの宗教的な著作から収集したこの世の生活をこんなふうに見る見方に対して、説教集や他の箇所の中では信者に向かって喜んでいなさい、と折に触れて勧めているのを見出すことができる。また説教集が持つ憂鬱な雰囲気の中でさえ、説教者が些細な日常生活から一度や二度

は喜びを引き出すことができるのを垣間みるのも事実である。しかし、説教者のいつもの態度からは私たちが些細な日常生活など想像もしなかったであろう。たとえば、ダンはロンドンの冬の朝に聞く「陽気な路上音楽」⁽¹¹⁾について楽しそうに話す。そのことに気づいていたからこそ、説教が主張するようにこの世の美しさに敏感に関心を持つことができたのだと思う。結局、私たちが見てきたように、ダンがこの世の成果を追及することは教会の外側と同じく内側でも精力的と言って良いくらいに続けてきたのである。だから、ダンが会衆に恐怖を与えるのを楽しんでいのではないかと疑い始めたり、ダンの説教の中の否定的な言い方が、怒りっぽい欠点の表れというより、自分の真下に整列している顔面蒼白の会衆者たちを脅かし押さえつけたいと願う表れであると疑い始める。恐怖を与えることで、ダンは芝居がかった勝利を手にすることができたのだ。

このように推測することが正当化されようがされまいが、はつきり言えることは、ダンの説教の中にその生活を見出したいと願っても、ささやかなキリスト教徒の喜びを途切れ途切れに求めるだけでは見出すことはないであろう。事実、ダンがとても詳細に描き出す腐敗し胸の悪くなるような関係の中では、このように追及していくと、時として明らかに冷笑的な調子になってしまふ。感じることでできる爽快感は、むしろ破壊それ自体の働きから生まれる。この世界はダンの餌食となり、熱狂的にこき下ろすことになる。ダンの使う言葉はその説教という仕事に大いに役立ち、この世界が物質を腐敗させていることに忌まわしさを織り込んだ織物をつむぎ出す。まさに引用してきた例文の幾つかのうち、例えば「暗闇の被造物に相応しい」とか「血で育てられた」という母親の子宮の中に巻き付き血に染まった胎児についての描写などを考えさえすればよいのであ

る。それがダンの視点で、ある変容させる力を楽しく味わうことになる。ダンには辛辣な喜びを込めて肉体には罪のない深みがあることを見る。

ダンは肉体が傷ついたり、腐ったりするのを想像すると、たちどころにペンに力が入った。目の当たりに見るように肉体が災難に会うという主題を追及する。色彩はダンの散文から全くと言っていいくらい欠落しているが、病気の主題に着手するときには表れてくるのである。「緑色の青白さ」「黄色の黄疽」「青い激怒」「我々の皮膚の上の黒いイボ」⁽¹²⁾死と徒党を組む者たちは、ダンが想像する世界で登場人物になったり、声になったりする。「ここで弾丸が男に尋ねる。お前の腕はどこか。そして狼(すなわち、癌)は女に尋ねる。お前の乳房はどこか。」⁽¹³⁾破壊的な要素は注意を促すものとして幻覚を見るように具体化する。誤ることのない趣向で腐敗の過程を詳述する。ダンは肉体が「海でぬめりを取るために洗われ」たり、墓の中で悪臭を放ち、腐敗するのを想像する。「最初にあなたの肉体が作られているどろどろした糞便と最後にはあなたの肉体が分解してあのどろどろしたものになる中で、そんなにも不快で、そんなにも腐敗したものは自然界にはない。」⁽¹⁴⁾腐敗した肉体は人間の精液のように流れやすいことや人間の精液は腐敗した肉体のように気持ちが悪くという両方の意味をここで述べようとする機転の利かし方は、想像力の表れとなる。その想像力を使ってダンは自分の作品を書く。その主題の捉え方の中に精神の揺れを感じる。

この恐ろしいほどの想像力の豊さの傍らに置いたまま、J・E・V・クロフツが目に見える美しさを求めることは、かえって哀愁に満ちた響きを持つ。しかし、クロフツは詩について話しているのであって、説教についてではなかった。どのみち、クロフツが説教集

の中でも、建設的な想像力を望むことは、充分に自然で、健康的であるように思える。事実、ダンはそのような望みも裏切りもない。ダンが精神的な放浪をしたために、説教集に関して本当に注目すべきことは、その説教の肉体を大切にする精神である。人間の肉体が、説教集の中に色濃く表れている。それが非難されているときとか、ダンが全く肉体的でないものについて話していることになっていくときですらそうなのである。私たちに語っている魂には「肉体と同じように骨がある」という。魂が罹りやすい病気に「さしこみ、疝痛、痙攣」がある。血液は魂の中で脈うって流れる。あらゆる罪は「魂を切り裂くことであり、刺すような痛みであり、静脈を切開することであり、魂の血を流すこと」である。手術で使われる用語は、肉体の知覚的で傷つきやすい部分の意味と結びついている。しかし、表面的には肉体は全くダンが注意を惹くような問題ではない。また、ダンは、「精神的に貧しい人々」を「彼らの精神の臓腑の中でさえ、腐敗し、苦しませ、内臓を冒すほどに潰瘍を患っているもの」として描写する。説教集を読むとき、繰り返し意識するのは、人間解剖学の中で観念的真理を定着させなくてはというこの気持ちである。罪とは、行いと心の動きではなく、生物としての集合体、すなわち神経、静脈、弁膜、内臓機能だと考える。罪には心臓がある。肝臓は「罪にまみれた行いをする身体全体の血液と命を運ぶ。」脳は「神経や靭帯をけしかけ罪と結びつける。骨髄は髄液や養分を骨という頑固で改俊の無い罪にまで送り込む。」⁽⁹⁶⁾ 知識の感情を豊かに混ぜ合わせることで私たちは骨髄の中に入り込み、生きた優しさを経験できる。

ダンは解剖学的緻密な用語を精神的な関係に移し変えることを中

世カトリック教会神父たちから学んだ。魂に骨があることは聖パシリウスからである。テルトゥリアヌスにクリュソストモス、それにアウグスティヌスはそれぞれ医学的イメージを使って魂とそこから生じる病気について論じている。⁽⁹⁷⁾ しかし、その話題を選び展開するときに、ダンには自分の趣向を凝らした。肉体の構造と機能はダンの心を魅了した。作品の中で言及しているのは、ダンが専門家ではないが医学文書の中で広く読まれており、当時の研究の最先端にいたことを示している。⁽⁹⁸⁾ ダンを追悼する詩の中でウォルトンはダンの医学的な知識をことさらに取り上げていて、その言外にはダンが一度は医者になることも考えていたことが含まれている。⁽⁹⁹⁾ ダンの継父ジョン・シミングズはご承知のように医者で、王立医学大学の学長だったから、ダンは小さい頃から医学的な話しを聞く機会に恵まれていた。ダンが十一歳のころ継父は家族をバーソロミュー病院に隣接する家に移した。このことでダン少年の意識にさらに日常の授業とか手術のことが入り込んでしまったにちがいない。⁽¹⁰⁰⁾ 大人になってから自分の手紙で証言しているように、ダンは自分の病気が非常に興味をそそる主題であることを発見した。一六二三年にダンが危篤状態（現代の専門家によると回帰熱と診断されるのだが）にある間、自分の症状と医者への反応を詳細に記録し続けた。それを後年、出版したのである。そのときダンは自分の説教集を権力への執念のほけ口にしようにして、説教集の中に一つの方法を発見したのである。すなわち手術室と診察室の心の高まりを応用する方法である。しかし、そこにはそれ以上のものがある。ダンの肉体についての話し方は、二つの理由で珍しく、とても人目をひく。第一に、ダンにはほとんど動きのある肉体に言及しないということである。肉体が持つ敏捷さと優雅さは、ダンが考える範囲外にある。それは、概し

て肉体の表面的な外見であるからである。ダンはむしろ肉体の臓器の部分、大きさと相互関連に興味がある。ダンの関心は、肉体の内部構造に立ち入ることである。ダンの抑えがたい衝動は生体解剖へ向かつている。説教の中で見る事ができるのが典型的であるといえるが、ダンは人間解剖学で使う腔と管、すなわち「暗渠と水槽」を通る軌跡に置き換えて自分の疑問を人間の精神の空洞で表している。「私が食料室、貯蔵室、円蓋、すなわち食道管、血管、尿管という肉体の管を研究するとき、それらの管は莫大な数である。私が精神の溶鉱炉、すなわち心室と脳室を研究するとき、それらの空洞は単なる筒ではない。」その説教は生理学の講義になってしまっているが、その講義している者がその説教内容とかけ離れてはいない。ダンは肉体の中、肉体の円蓋や溶鉱炉の場所を説明しながら、それも広大な組織体である平らな所や奥まった所を這い上がって行くように見える。ダンの健全で慣用的なことば（たとえば、「ポートル」という液体を測る単位で莫大な数を表す）によって、そのことばの回りを登りながら、その構造が固められる。

二番目のダンの解剖学のことばの特徴は、特に次のような例文のときにも表れてくる。人間の身体は、生命のないもの（たとえば、「食料室」「貯蔵室」「円蓋」と定期的に同化したり、混ぜ合わされたりする。この結果として肉体を殺すのではなく、その大きさとか實際を強化することになる。この奇妙ではあるが、力のある技法はダンが天才であることをよく示していることである。そこでこの章の後半で、ダンが書き残した様々な方法をいくつか検証してみたいと思う。手始めに、『祈禱集』からの一節を引用してみる。ダンはそこで人間を「小さな世界」とする古代の小宇宙の概念を思い、その概念を拒絶しているのが分かる。なぜなら、ダンはそのような概念

は人間の肉体の複雑な働きに不十分な判断を下すと感じるからである。

人間はこの世界よりもっと多くの部分から成り立っている。もしも、この世界に今あるようにその名称の一つひとつが人間の中で広げられ、伸ばされるなら、人間は巨人となり、この世界は小人になってしまおうだろう。すなわち、この世界は地図に過ぎず、人間がこの世界になってしまおうということである。もしも、肉体の中の血管すべてが川に広げられ、神経のすべてが鉱山の鉱脈に、お互いに重なる筋肉のすべてが丘に、骨という骨が石の採石場に、他のあらゆる部分がこの世界に存在するものと呼応する名称の部分に広げられるなら、空気は人間というこの地球には少な過ぎるし、天空はこの星には十分なだけである。

人間の身体は、さらに入り組み多種多様になってダンが探検する眼下に広がっている。ダンの散文は、ネジを回転させるように小宇宙を焦点に絞りこむように描かれている。馴染み深い肉体の部分は、危険を知らせる地理上の範囲を必要とする。ダンが書き終わるまでに、巨人のようになった人間は惑星の間で自分の首を伸ばしている。しかし、その効果は単に延長のようなものではない。骨、石、川、鉱山、血管、神経が、それぞれ混ざり合う。その結果、もっと充実した生き物が、こぶ、くぼみ、空洞を兼ね備えて出現する。トラハーンの詩の中の「清く澄んだ血管」は単に色の付いた外観を示すのに対して、ダンのことばは、肉体に入り込み、宇宙感覚に訴える。奥まって幾層にも重なった構造を知らされる。たとえば、ダンが

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

「互いに重なる筋肉」について話すとき、そのことばで入り組んだ筋肉層の中に入り込み、その深みを感じることができる。逆説めくが、その記述の中の肉体は、さらに大きな影響力を持つことになる。なぜなら、肉体が終始死んだものになぞらえられるからである。ことさらはつきりと肉体が分かれた存在であることを、一時的に麻痺した身体の一部を扱うときのように心に留めるのである。

詩の中での同じような例を見つければ、難しくないし、詩の何編かは非常に不思議な効果を含んでいることの説明はつく。『恍惚』の中の恋人たちを見てみよう。

ほくたちの手は固く結ばれる、

そこから吹き出る濃い香油に満たされて、

ほくたちの視線が絡み合い、ほくたちの目を

一本の二重糸で縫い合わせる。

共に結び合わされ結合された恋人たちは、非情なほど遠くへだたっていることが必要である。二人は生命が無いという事実は（二人の魂が空っぽにしている）この詩の特質である。死ぬことで二人はさらに激しく物質化される（「墓の石像のように」）。しかし、縫い合わされた目の着想は、死んだ状態ではない。輪になった糸という考えは、四つの目を貫いていてじまになる。A・S・ブランデンバーグは読者がこの着想が持つ性的な部分に気づかないことになっている、と述べてきていた。気づいていれば「馬鹿げて不愉快」であろう、という理由からである。その批評家の警告は、その着想の効力に貢献している。刺し貫かれた目という考えにたじろいでしまふ。自分の題材を殺すことで（目をビーズにすること）ダンはその

題材がさらに私たちの気持ちから離れないようにした。

汗もまた役に立つ。なぜなら、手のひらを握って汗をかくことで、二人の恋人たちは互いに結び合わされたからである。その「石像」は、生命あるものと無いものとの間に生き生きと魂を発散させている。汗は、肌を通して出てくるが、生きている機能の役割をちょうど終えたところなのである。ほぼ同じ位置にある涙のように、汗は、生命が無いのに動いているのがダンの好奇心をくすぐったのかもしれない。ダンは『愛の食養生』の中で汗と涙とをわざとごっちゃにしている。「みんなを見回す目は、泣いているのではなく、汗を出しているだけ。」「亡霊』の不実な女性の汗は、ろうそくの光の中で金属みたいに光を放っている。

すると、可哀想にポプラのように震え無視されたおまえは、冷たい水銀の汗の中に横たわるのだ

その女性は、恋人たちが接合剤と糸を出すように、水銀を発散させて、異常な体質であると思わせる。その合金の汗を流すことで、その女性はさらに現実味が増す。皮膚から出るどんな発散も、ダンにとつては凝固するものとして同じように役立つのである。たとえば、『嫉妬』の中の夫は、かさぶたに覆われて死の床にしているのが思い浮かぶ。「身体はひからびた皮で覆われている。」確かに、この箇所は、ハムレットの父の描写と比較したくなる気持ちにさせてきた。すなわち、毒殺された肉体である。

瞬時の皮疹が癩病やみのように
忌み嫌われるかさぶたに覆われて、

わしの滑らかだった肉体のすべてだ。

二つの抜粋は、死んだ外皮を生きている皮膚と合体することで、表面が病んでいることについて私たちの感覚に警告する。

その利点は、速攻性にあり、生と死のなれあいには、読者をはねつけるか、魅力を感じさせるかのどちらかに使われる。『幽霊』の愛されない水銀の汗を流す女に対してのように、ダンの「問題VII」の水銀の女たちを置くかもしれない。この一編の中で問題となる疑問は、なぜ一番美しい女性がいつも一番悪いのかということである。ダンには疑問を発する。「心は肉体の体質に従っているから、その体質が変わりやすくなって、それゆえに心も変わりやすいのだろうか。あるいは、一番純粋な金属でできた鐘は、調子のよい調べで、とても大きな音をたてるように、最後の喜びの記憶は、体質の中でより長く続き、次にその体質を配置する。」ダンが着想するとき、その女性の中の何かは、打ちたたかれた鐘のように、愛し合ったあとで、振動し響き渡る。優雅に調子を合わせた肉体を呼び起こすことで、それ自体の記憶とともに心との関係を断ち、ロレンスの『虹』の中の瞬間を思い出させる。そのとき、トム・ブラングエンはリディア・レンスキーを守るようにやってきて、帰るときには水仙を一束残す。

女は教師のためにお茶の用意をしつづけた。テーブルが必要だったので、化粧台のそばにラップ水仙を置いたが、誰も気にとめなかった。ただ女の手に触れた花の冷たさだけが、しばらく残響のように残っていた。

花の感触が、音のように肉体に留まる。ダンの「問題」の中で激しい興奮は、音符が消えずに鳴り続けているみたいだ。肉体を満たす。女性たちを純粋な金属の鐘になぞらえることで、現実の生活の目目に触れない大騒ぎを提示する。その金属的なイメージによって女性たちは、不活発ではない、もっと生き生きとしたものになる。

生きていくものと死んだものが合流するときには得られる詩的效果にダンが心配するのは、髪の毛や骨のような人間解剖学その部分に医学的な興味を持つことで培われたように思われる。そこには生命と感覚があいまいで限定されて存在しているだけである。『第二周年詩』の中でダンが当時の科学的な意見を研究したとき、指の爪のように髪の毛は大論争的であるのを正確に観察した。専門家たちは髪の毛を身体の機能と分類すべきか、単に廃物、「排泄物」として分類すべきかどうかハッキリしていなかった。フェルネリアスは一六一〇年発行の自著『ウニヴェルサ・メデイチナ』の中で折衷案として排泄部門に分類した。ダンには科学的な問題を解決しようとしているのではなく、着想が人間生活のこのように緩慢さに関わるものに引かれる。骨に感覚があるのかということについて十六世紀や十七世紀の外科医の間でなされていた議論で、漠然とした一致点は、骨には感覚はなく、感覚膜に覆われているというのであった。ダンはこの理論の微妙な記述を良き業についての説教に組み込んだ。「骨自体には感覚はないのです。苦痛はなく、ムムプラナエドレント（感覚膜）だけがあります。その小さな膜、その薄皮、その薄い皮膚が骨を外側、内側をおおっています。苦痛やいらいらに敏感です。」感じられるものと感じるもの、死んだものと生きていくものとの接合点は、ダンの細心の注意を引きつける。

『遺品』や『葬式』の中での接合点は、巧妙で複雑である。髪の毛

毛と骨とは結合し、死後も地下に潜んで謎めいた生き方を保つとダンは想像する。墓堀りが「骨に絡む金髪の腕輪」を堀り返すのをダンが語るとき、その詩行で驚かされるのは、生と死が共に絡み付いているのを提示しているからである。髪の毛は死んでいるが、自然に伸びた金髪は、ずっと生き続ける地下の生命力を立証するように思える。さらに、その金髪は、ダンが示しているように、触れることには要注意なのである。

ぼくに死に装束を着せる者よ、どうか傷つけたり

詮索したりしないでくれ

ぼくの腕を飾るこの秘密の髪の毛の束を。

きみたちが触れてはいけない秘跡、しるしなのだから。⁽⁶⁾

生きた者を覆っている「小さな膜」や「薄膜」のように、伸びる髪の毛は、「苦痛を感じる」か、感じるかもしれないと想像できる。ダンが続けて推測するように、髪の毛は代わりの神経組織として骨に生命と感覚を与える働きができる。

これがダンの最も有名な骨と髪の毛である。しかし、分け前にあらずかる生きている秘跡は、たしかに部分的に生きていて、より幅広く永遠の興味を持つていることの唯一の表明である。骨と髪の毛がくっ付いているか、半分くっ付いていることは、興味をそそるし、ダンはそういうことをいやいや書くことはできない。「流れ星を拾いに行け」というその不思議な試練の中で、髪の毛は頭に降り立つ。まるで外側からやってくるように。

一万もの夜と昼を駆けめぐれ、

雪のような白髪がおまえの上で齢を数えるまで。⁽⁷⁾

髪の毛は、白髪になるし、天気みたいに、知ることができないほど私たちの知覚的な生命とかけ離れている。「聖列加式」の中で「ぼくの五本の白髪」を数えたり、「愛の神の高利」の中で「ぼくの黒髪が白髪と同量になるころ」と判断するその詩人は、異常なほどに注意深く髪の毛を観察していたように思える。「君主国は髪の毛がそれ自体で白髪になるように崩壊する」とダンは説教の中で述べる。その帝国の権力は、髪の毛一本に集まる。骨は「十字架」の中で心が奪われるほど詩的な注目を受けるが、そこでダンが注意を引かれる生命あるものと生命のないものとの融合がある。骨は、にぶいけれど、防御したり、最も生命力に富んだ生きている機能と協力し合う。

骨の壁を通ってあなたの腕は、

縫合線で息をつく。⁽⁸⁾

脳は頭蓋骨の接合部分から余分の熱を取り除かなければならないというのがアリストテレスの考えだった。なぜそれがダンにアピールしたのかを見てみよう。骨を覆う膜についての理論のように、肉体の領域の内側で柔らかいものと知覚のないものとの密接な結合を含んでいたのである。

ダンが性の行為について書くとき、読者を過敏に反応させる同じ技法を使う癖がある。この一番良い例が、エレジー『比喩』⁽⁹⁾の中にある。批評家たちは、猥褻でつまらないものと問題にしないでいた。例えば、ウィルバー・サンダーズはダンのこの詩の目的が「シヨツ

クを与え、それからクスクス笑うため以外の何物でもない」と述べている。その詩は故意にダンとその恋人と恐ろしく気もちの悪い別のカップルとを比べている。しかし、ダンがそれを扱うとき、その詩はただ一連の侮辱ではなく、豊かで技巧を凝らし医学的にも知られた身体的な経験なのである。特にその相手の女性の汗の描写の吐き気をもよおすような部分である。

悪臭を放つ汗の泡がきみの愛人の額を不潔にしている、まるで成熟した月経の泡立ちが精液のように溢れて。

ここでダンが肉体からの排泄分泌物に興味を持つようとしていることが分かる。そして、単なる汗以上に満足させるものを手に入れるために汗、膿、精液、月経を混ぜ合わせている。その女性の個人的な描写は、同じように結果として気もちの良いものではない。

きみの恋人ときたら発射した大砲の恐ろしい口のように

あるいは粘土の鑄型に流し込んだばかりの

熱い液体状の金属か、まわりの草が燃え去った

あのエトナ山のように。

これが成功しているのは、その目的を手に入れるときに、性の器官を火や鑄型に流した金属に例えているからである。熱い大砲の砲身と結びられるという暗黙の考えは、柔らかいものと感覚のないものと結びつきを利用している。そういうものをダンの作品の中で特に警告を発するような仕方を取り上げてきた。燃える草のような陰毛という機知に富んだ描写は、その不快なものにチクチクするような

手触りをつけ加えている。この金属になった女性は、金属の点では同じであるが、さまざまな点で「問題文VII」の誘惑する金属の女たちとは違っている。ダンはまだ違った目的ではあるが、臓器を臓器でないものに変える実験をしている。その詩を通して、ダンの目的は（若い詩人たちにとっては共通のものである）自分の反応を強烈にすることで一般的に肉体の世界をいかに弱く、おぼろげに理解しているかを示すことである。

そのエレジーの最後の行でダンは二組のカップルが愛の行為をするときのその行為を比較する。先ず、一方のカップル（きみの最後の行為は粗雑で乱暴ではないのか。／鋤が石ころの地面を切り裂くときのように。）それから主人公とその恋人。

そんなにも素晴らしく献身的に

司祭たちが敬虔な捧げものを扱うときに、

また外科医が探るときのように

ほくらが抱擁し、触れ、キスをするときのように

その最後の直喩は、当時行われていた医学からのもので、外科医がメスを差し入れて傷を調べることにしている。その医療器具は銀でできていて、先は鋭くはなく傷や空洞の方向とか深さを探るために使われていた。その処置の仕方こそ、ダンが聖職に就いていた時代に続けて興味を持ったことだった。しかし、説教集の中の神の力は、罪人の心臓を突き刺すものであり、男性性器の代わりをためている。この刀は、ダンが会衆に語るとき、「傷を探すためのメスとして」存在することになる。ダンは、不撓不屈なものとして「曲がらずに傷を探し出す」その能力を使っている。詩の中でその

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

比喩の苦痛に満ちた言外の意味は、外科医と恋人が共に関わる無限の優しさと気にながら侵入することの意味を混ぜ合わせる。他の例でも見られたように、ダンは生命あるものと生命のないものとを並列することで活気溢れる効果を生み出している。この場合、最も収縮するような感覚の鋭い生きた細胞の間を鈍い金属が侵入することになる。

ダンは、もちろん、このような技法を使うただ一人の詩人というわけではないが、その技法をとっても創意工夫を持たせて使っているのである。『比喩』の中の手術用メスとブラウニングの『夜の密会』の中のボートの舳先とを比較することができる。ブラウニングの詩は、一人の男が愛する女を訪れる道すがら語るものである。

灰色の海と長く黒い陸地、

大きく低く半分の黄色い月、

眠りから覚めて気の荒い小環の中で

驚いて小さい波が飛び跳ねる

ぼくが進んでゆく舳先と共に入江にたどり着き、

水浸しの砂で舳先の勢いを失わせるとき。

語り手が登場することで、語る言葉が影響を受ける。女性を見つめる期待は、乱れた小環に驚いて眠りから覚めさせ、ボートの回りの波を見る語り手の見方に作用する。舳先が水浸しになった砂に埋まってしまふ様子は、勃起した陰茎の固さとそれを受ける柔らかな女性の性器をあまりにもあからさまに連想させるので、ヴィクトリア朝時代の詩の中にもそんな詩があったのかと半ば驚いてしまうことになる。舳先が水しぶきをあげて穴を掘るといふ表現は、条件づ

きとはいえ非常に官能的に響く性交の言い替えなのである。なぜなら、使われている二つの単語（舳先と砂）が生命の無いという理由で私たちは進んで人間性を排除したものに對して肉体的な側面に注目することになるからである。ダンは、メスと傷の関係をを用いることで官能的な意味だけではなく感覚的な意味も取り上げている。人間の身体の柔らかさの中でしかりとした効果を見ている。と同時に、医学的な内容から恋人たちの問題へと考えさせるように促しているのである。すなわち、患者には外科医が必要であり、外科医が持っている治療効果である。

別の、さらに残酷な性交のイメージは、『リンカーン法学院で作りし祝婚歌』の中に出ている。そこでは、『比喩』の中で言及している司祭と犠牲の考えが締めくくられている。衣類を脱ぎ、床に入ったとき、花嫁は、

花婿が望む段取りで、横になる。

油注がれた子羊のごとくに。その時、優しく

司祭が跪くのは花嫁の臓腑に深く埋めるため。⁽⁸⁾

辞書によると「深く埋める (embowel)」という単語は、「内臓を引き抜く (disembowel)」と同じ意味に使われるが、もしダンが「内臓を引き抜く」を使っていたならば、その詩の意味は違ったものになっていたであろう。なぜなら、ダンが選んだ言葉のその形態は、まるで内臓に何かが入ってくることになっているかのように取れるのを利用している。だから、その語形はもつと自然に差し迫った挿入という内容に合っている。しかし、その単語の実際の意味は、これで多くを語れない。司祭が優しく段取りをし、ダンが見えないメスを

持っているという事実にも関わらず、子羊の内臓は床の上にそっと山積みされる場所であり、その犠牲を捧げるという暴力に匹敵する何か花嫁の身にも起こることになっていることに明らかに気づくのである。司祭が「跪いて」その子羊に向かって這っていく詳細な描写が、寝室の場面に当てはめられると、奇妙に真に迫ったものがある。花婿が居心地の悪い立場にいるのを垣間見ることになる。全体の文章は、苦痛を伴う愛との繋がりの中ではメスと傷という関係にある直喩に似ている。もちろん、その意味で全体の文章は、确实で助けになるものに対決させることで肉体が傷つきやすいことを強調している。

愛の場面での生き生きとした状況の役割を生命の無いものに置き換えるという工夫は、『サマセット伯の結婚の祝婚歌』の中では最も遠い意味に受け取られる。その時、花婿は寝室にいる花嫁のところにやって来る。

流れ星を見る花婿が素早く走って行き、

その場にゼリーを発見するとき、

これが流れ星だと教えられて、

同じ量だけ捕まえて、花嫁を発見する。⁽³⁾

最初の二行の中で言及しているのは、ノストックという名の藻の種類である。その藻は雨の後の乾いた土壌の上にゼリー状のかたまりとなって現れる。十七世紀には流れ星の残りだと考えられていた。花嫁をゼリーに変えることで、ダンはもちろん花嫁が心配のあまり震えているという意味を伝えている。しかし、ダンはその以上の意味を伝えているのである。流れ星を捜しているときにゼリーを見つ

けることは、花嫁を一人にしている状態であって、明らかに狼狽することである。当惑と失望の要素があると言ってもよい。ダンが使う直喩は、複雑に花婿の感情を代弁している。衝撃は、ある感じと混じり合う。これはダンが予期していたものではなく、初め裸で現れた女性は、ダンが知っていると思っていた人物ではないという感じである。新しい服が馴染みのない服を着た友人に会うのと同種の疎外感が漂う効果がある。(ダンの連は続けて説明している。)その説明は、それ自体巧みに弱まっている。裸の女性を見ることは、奇妙な服を着た人を見るようなものであるから、裸であることは、衣服のように情性で別のものになる。その上、花嫁をゼリーのように生命の無いものに変えることで、ダンには花婿が束の間の印象を持つことを伝えている。裸になって花嫁は、花婿が確かに注意を払う以上に全体に生身で作られている印象である。

ダンが人間の身体の深みや浸透する力を感じることで、例えば耳のような身体の開口部分に特別な興味を持つ。ダンは、耳の中の三半規管の螺旋紋導管にあたる「内耳 (labyrinth)」という言葉を使つた最初の人であつたらしい。それには迷路を指す意味が含まれている。十七世紀の後半からは、「内耳」は医学用語として受け入れられていた。オックスフォード大辞典の解剖学用例に関する最初の記録は、一六九六年である。だが、ダンは自分の詩の中に三度使っている。耳は「内耳」として出てくる。『第二周年詩』では一九七行目、『連禱』では二一八行目、そして一番早くて良い『諷刺詩II』の中

言葉、言葉、その言葉が引き裂くのは、

柔らかな乙女の耳の優しい内耳。⁽⁴⁾

耳の鼓膜を引き裂くのに必要となるのは、一番鋭利な言葉である。それで耳の巧妙な作りが確かめられる。引き裂かれる体内のものを示すことで、メスと傷の関係にある直喩のように、鋭く私たちの感覚に作用する。

身体の内側の世界を打ち立てようとして、ダンはそれを取りまわっている神経と繊維について再び詳述する。『葬儀』の中の髪の毛の房は、身体を通り抜けて髪の毛の網状組織に引き出される。

というのも、もし、ぼくの頭脳が身体のあらゆる部分を

神経の糸を下に垂らして、

各部を結び合わせて、ぼくを一つにすることが

できるなら、上向きに生えたこの髪の毛は

力と技をぼくより優れた頭脳から得ているので

それを上手にやることができる。

「糸」と「結び合わせる」の両方が表しているのは神経が紐のように丈夫で扱いやすいということである。内側に結び合わせるという考えは、身体の表面の下に横たわる奥まったところについての意識を広げることになる。「下に垂らす」という言葉は、内側の世界についてこの感覚につけ加えられた。なぜなら、まるで神経の糸が垂れ下がっているか、隙間を通して自由に落ちていくようにその動詞が感じさせるからである。著しく能力のある髪の毛は、それ自体の「力と技」を持っていて、偶然にもダンが髪の毛に執着していることとのさらなる見本である。

解剖で使う糸への興味は、再び『第二周年詩』の中に表れる。ダンは、エリザベス・ドゥルリーの魂が「ビーズを通る紐のよう

に」肉体の死に際して星々の間をスピードを上げて行くのを想像する。その考えによって、ダンは自分の詩に背骨を入れる機会を手に入れることができた。語られているようにエリザベスは、星々に糸を通す。

脊髄は、ぼくたちの肉体のたるみを直しはしないが、首と背中の小さく連なる骨を素早く結ぶ。

私たちは自分の背骨を使ってエリザベスの旅を経験することができ。「脊髄」は柔らかく柔軟に響くが、脊柱を「素早く結ぶ。」そこで「神経の糸」のように、ダン風の強靱さと優しさの混じり合ったものを生み出している。「たるみを治す」や「神経」や「髪の毛」のように特別に硬く柔らかい言葉は、若い時の段階でダンの頭の中には蓄積されていた。その時、ダンは身体の強さについて考えていた。だから、「神経の通った支柱、『風』の中の彼の髪の毛のたるみを直せ」についての詩行を見て欲しい。

ダンが解剖の冒険に一番視覚的に関わっている中に『別れ、窓ガラスのぼくの名に』がある。ここではダイヤモンドを使って窓ガラスに自分の署名を刻んだ時にできた釘状の小さな引っかき傷が、粉々になった骸骨のように見える。

、このごっこつした骨張った名を

ぼくの、粉々になった骸骨だと考えなさい。

ダンは自分の骸骨が「堅固」であり、ダイヤの鉱床のような永遠性を主張する。骸骨は建築物のように全く硬く、「ぼくの肉体のたる

きである骨」を表現している。そのしなやかな「筋肉、神経、血管」を取り除かれたまま。ほねをたるきだと考えることは、ダンが身体を建物と考えるのと関係がある。説教集で見ることができている。しかし、その詩はいつも心配げに承知しているように窓ガラスに引っかけ傷をつけて建物の永遠性を主張するのは、奇抜である。新しい恋人に話しかけるために未来に開け放している女性を想像するとき、主張、名前、窓ガラスの儂さを私たちは経験する。

きみの手が考えもなしにこの窓をさつと開け

窓ガラスのぼくの名が震えているのに、

機知や土地できみの心に新たな攻撃を

思いつく男に目を留めるときには、

骨が今生きているのである。小さく骨だけの骸骨は、窓ガラスの上で震えて、自分自身が裏切ったのをふと耳にすることに成り、その恋人の心の動揺と構造的には同じことになる。すなわち、恋人の情緒的な動揺が、X線の写真に表れている。「ぼろぼろ」であるだけではなく「骨張って」いる堅固でかつ神経質であるから、この小型の骸骨は肉体の二つの性質、固いが傷つきやすいという意味を伝えている。ダンが習慣的に感じていことでもある。

例文は、今まで人間の身体を描写する全てを考えている。しかし、ダンの領域は、もし私たちがそこに置き去りにすれば、不当に削られてしまう。ダンには動物についてあまり書かないが、ひとたび関わると、動物に対する反応は、驚くべきものである。「蚤」を考えてみ

よう。この詩は、アーサー・キラーカウチ卿に「英語で書かれたただ最も胸が悪くなるものにすぎない」のだと言われたし、現代の批評家からでさえ気の利いた批評を受けたことはなかった。実際、蚤に関する詩は、昔から猥褻な冗談だった。ヨーロッパ文学の至るところに、その多くがあつて、間違つてオヴィディウスを原型だとすることに落ち着いていた。標準的な組み立ては、蚤が女性の身体の上にいるのが分かり、這い回り、出くわす細々したことを言う、というようなものである。もちろん、胸や性器について蚤が語るのは、粹な冗談だと考えられた。ダンは、この恥ずかしいくすぐり一切を脇に押しやり、性的結合について強引に論ずる独白としてのジャンルを再構築し、全体として女性の肉体について何も言うことなしに済ませることで、血を吸う蚤の身体に注意を集中させる。蚤の身体の中で話者と女性の血が混ざり合っている。

この蚤はきみであり、ぼくであり、また

ぼくらの結婚の寢床にして教会である。

両親もきみも不承知なのに、ぼくらは結ばれ、

この生きた黒玉の壁の中に修道士みたいに閉じこもる。⁽⁴⁰⁾

この最後の行の微妙な一徹さは、今まで英語で取り上げられた蚤とは全く違った蚤を取り扱っている。その生き物の固くて黒い外皮が、「生きた壁」であると、ダンが私たちに驚嘆しつつ知らせてくれるのである。この句は、『十字架』の中の脳を覆っている「骨の壁」と同じ注意を引きつける。その上、その蚤が教会と修道院に変身すること、その危うさを強調する聖なる連想を起こさせ、そのスケールは、ここでは微視的になっっているけれど、私たちは説教の中でダ

ンが身体の丸天井の大建造物をよじ登るのを思い起こす。

私たちが説教集について見ていたことから、その同じダンが、そのような詩を書き、蚤のごとき極小の生命体に対して何らかの感情を持つていたなどとは想像できないように思えるかもしれない。しかし、そうではない。全くそんなことはないのである。「蠅は」とダンは述べている。「太陽より高貴な生き物である。なぜなら、蠅には生命があるが、太陽にはないからである。」このような見方は、聖アウグスティヌスが最初にしたのであるが、ダンがそれを説教集の中に何度も引用したところによると、特にダンには印象深かったようである。⁽⁴⁹⁾アウグスティヌスが言う蠅は、通常のダンの説教集のより、もっとトラハーンの方に近い感じがする。そのことに関して言えば、ダンの描く釣り鐘型の体形の女性のように、D・H・ロレンスの方に近いものを感じさせる。ロレンスは『エトルリア紀行』の中で生命を讃えているからである。「獣の力で、たくさんの植物が壊された。でも、植物は、また生えてくる。ピラミッドなんかその雛菊と比べたら一瞬たりとも生き延びることはない。」⁽⁵⁰⁾説教集の中で一度か二度、ダンは、アウグスティヌスのロレンス風の逆説を調和させようとしている節がある。「塵に帰っていく祝福されない雨のしずくは、塵から甦り、もはや墮落することのないあの栄光の中にある聖者たち」と同じほどの神の子供であり、私たちの親類である、とダンは主張する。そして後の説教で、最も尊厳のない被造物の中にさえ、神が見られるかもしれない、と論じている。「飛んでいるぶよが、すべて大天使であるとすれば、私に告げることの出来るのは、神が存在するということだけである。一番気の毒な蛇が、私にそう告げる。」⁽⁵¹⁾そのぶよは、私たちがこれを読むとき、東の間の大天使の輝きへと必然的と言ってもいいほどに光る。だが、実際のところ、

ぶよは大天使ではないし、もしそうなら、役に立たないであろうとダンが言っている事実が残る。ぶよは、ぶよのままだし、蛇は、なお気の毒だし、雨のしずくは、なお「栄光ではない」のである。ダンの説教集は、より暗い目的が含まれていて、勇敢な蠅や雛菊をそんなに使用することはできない。詩集と説教集との間で呼応し会う着想にもかかわらず、説教集の中で選んだ宗教的な立場によって、ダンは、蚤がもっと陽気なキリスト教徒の気質に重要であったとしても、黒玉の生きた壁を持つ蚤についてのどんな意見も省かざるを得なかった。

しかし、詩集に戻ってみると、ダンの最良の自伝的な書き物は、断然『魂の発展』の中ということになる。ところが、その詩は、全員一致と言っているほどに辛辣な非難を受けていた。グリアスンは、その詩が「失敗」作というだけではなく、その「全くの醜さ」と「奔放に不快な」詳細がダンの心の最も不愉快な側面を示している⁽⁵²⁾とまでも断言せざるを得なかった。「好奇心をくすぐるが、不快な詩」と読んだエヴリン・ハーデイは、グリアスンの説に賛成だった。⁽⁵³⁾R・C・ポールドは、それをダンの全作品の中で「最も失望させる」ものと考えた。エヴリン・シンプソンは、その一般的な悪評に自分の意見を加えて、「ドウ・クインシーはこの詩を称賛していた唯一の著明な批評家である」と細心の注意をはらって書いている。⁽⁵⁴⁾その記述は、全くの真実というわけではない。ブラウニングもまた称賛していて、『クローシックの二人の詩人』の中にそのダンの詩から三行引用した。しかし、ブラウニングもドウ・クインシーも、その詩が示す生命に対してなぜ並外れて接近し微妙に反応するのかを、自分たちの言葉で説明してはいない。ドウ・クインシーは「いくら巨大なダイヤでも、その実体を構成しているのだ」し、その詩

の思想とか描写には、「エゼキエルあるいはアイスキュロスの持っている熱心かつ陰気な厳肅さがある」と言っている。ブラウニングの言い分は、自分の詩の登場人物に語らせているのであるが、その詩が「尊敬すべき権威あるダン」の作品であり、「青銅で作られるほどのダンの喉」から「湧き出ている」という。

作詩年代の根拠だけから言えば、それは、その幅が広くなってしまう。なぜなら、その詩の序文は一六〇一年十六日になっている。だから、はっきり言えるのは、ダンがエジャートン卿の秘書として雇われている間か、雇われる前のどちらかで書かれたものである。その詩は、尊敬すべきダン博士の作品からはほど遠い。詩の構想は、諷刺的な叙事詩の形式であり、禁断の木の実である林檎の魂の跡を辿っている。それはイブが徐々に墮落した人間の受肉を通してもぎ取ったものである。その魂はどこで終わったのかが論争されている。カルヴァンとエリザベス女王は共に候補者である。カルヴァンは、最後の魂の秘密を打ち明けられる人であったとベン・ジョンソンがウィリアム・ドラモンドに言ったが、⁽⁶⁾ダンは、エリザベス女王がその答えであると詩の中で暗示しているようである。もちろん、どちらにしてもその詩を反プロテスタントにすることが出来なかったという事ではない。そこでその詩をダンがカトリックの信仰に傾いているといふかなりの証拠とすることができると確信してもよいであろう。しかし、問題は解決されてはいない。なぜなら、ダンは、その作品を終わらせなかったからである。ダンは、最初の巻の五十二連の後、急に止めてしまった。その時まで、その魂はマンドレークを通して、急に止めてしまった。その時まで、その魂はマンドレークを通して、スズメ、魚、クジラ、ネズミ、二頭のオオカミにサル、そして最後にはテメックという女性に到達する。カインの妻になる女性である。その母親はアダムの五番目の娘シファアテシアである。

そのサルは恋愛関係を持っていた。

この世界を有機的に捉える視点から見ると、この詩は確かにダンの傑作である。読者をその主張から受け入れるにたる正しい精神の枠組みに入れるために、先ずスズメが孵化するのを描写しているところを引用するのは役に立つであろう。マンドレークから逃れるとき、魂が徐々に入り込む。

小さな青い殻に、かわいそうな

温めている鳥がそれを覆い、じつと長く抱いた。

やつと雛が殻を蹴り、自分で殻を啄んだ。

スズメが一羽這い出し、この魂の動く館

羽毛のない腕の部分に堅い羽根が、今歯茎を通して生える子どもの歯のように苦痛を伴って破り始める。

スズメの身体はまだゼリー状で、骨は糸状、

新しく羽毛で覆われた外皮が全て覆っている。

開いた口は、前の家のようにたくさん詰まっている

そして初めのうちは静かにさえずるが、

肉をくれと大きくさえずる。肉は人間のためだから

スズメの父親は子どものために盗み、餌を与える

一ヶ月もたつと、メスのスズメから離し、⁽⁶⁾駆り立てる。

批評家が、この詩行を含む詩を見い出すために、たとえ他に何も含まなくても、「失望」だけは、普通でない秩序の退屈さを必要とする。ダンの同時代の人々の間で、私たちはそんなにも感情をあらわにして記録された新しく孵化した鳥をどこで見つけるのか、と問う

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

かもしれない。殻の色、親鳥の温もり、巢の中でせがむ大きな口は、脆いが力強い生命の感覚を養うために協力している。「羽毛の外皮」というお腹の中で「子供」が蹴るといふ人間的な感覚にもかかわらず、スズメは道義に反して大いに親不孝の振る舞いをしながらも、全体としてスズメのままである。骨は、なお半分透き通ったゼリー状で糸状になって、一片の窓ガラスの中に刻まれたあの「ぼろぼろの骨」の名前のように、あるいは脳が命ずる「筋肉の糸」のように、奇妙に呼び起こすような仕方です。堅さと脆さを混ぜ合わせる。私たちはそれをダンの非常に特徴的なものと見てきたのである。そして、「ゼリー」はサマセット伯がベッドで変わる「ゼリー」という意味を含んでいる。精液という「排泄物のゼリー」の意味である。「ゼリー」という死んだ身体は溶ける。私たちはダンが説教集の中で満足して眺めるのを見てきている。

特に人間の読者としてスズメの皮膚の内側で私たちを捉えているものは、歯茎を破って出てくる歯と伸びてくる羽根との間の同一視である。身体を歯茎全体であると思われようなものと感じるように進められている。歯が腕を破って出てくるのである。ダンは、プラトンからこの考えを思いついたらしい。「フュードラス」の中で魂が羽根を生やすことについて書いている。「さて、この過程で魂全体は、鼓動し動悸を打つ。歯が生えかけている人で歯が生え始めるときは」歯茎に苛立ちと不愉快さがあるように、魂は羽根が生え始めるときには、熱をおび不愉快でむず痒くなる。⁽⁹⁾ ダンが魂とそ

の行いについての詩を書いていたので、『フュードラス』はダンが参考にする御誂え向きの原典であるだろう。しかし、プラトンの中では何が形而上学であったのかをダンが肉体化した。歯のように皮膚を飛び出してくる羽根は、魂の上に生えてこないが、雛鳥の「裸

の腕」には生える。

もう一つ別の豊かで密度の濃い微妙な内容が含まれた詩は、人間の胎児の形を描写している。そして、とても偉大な詩なので、つまらない作者であるとの評判をとってしまう引用箇所をいたるところから取り上げることができる。

アダムとイブが契りを交わして、今では錬金術師の同じ火のように、イブの穏和な子宮には、火が入り、胎児を形作っている。一部は、海綿体の肝臓になり、自由に流れる水路のように高い丘の上を豊かに

到るところに生命を守る水分も走らせた。

一部はそれ自体を固くして、分厚い心臓になる。

その忙しい溶鉱炉の生命の液が分け与える。

別の一部は感覚の井戸になった。

優しく、十分に武装された感情を生み出す脳、そこからあの筋

肉の紐が私たちの肉体を結びつけ、

ほぐれる。⁽¹⁰⁾

特質に対するその気配りが、ここではとても綿密なので、実際に私たちの手の中に繊維質で、ぶよぶよになった、しみ出る液状である人間になりかけの胎児を産むことになる。その熱気、脈、凝固作用が、私たちの感覚に直接つながる。日常生活の経験の中でダンが言葉をむりやり行為にしてきたものに一番近いものは、実際はそんなに近くはないのだが、手術で使う観察用フィルムから受ける、人びくびくさせ、感情をひどく害する感じである。しかし、その経験

ははっきり視覚的であるのに対して、ダンの言葉は直喩でふくらんでいる。言葉の凝縮した意味は、複雑で豊富である。「水路」や「溶鉱炉」が内蔵している意味によって、私たちは以前見た説教の中の肉体の溶鉱炉、丸天井、肉貯蔵室のように、胎児の込み入った構造の中に巻き込まれる。その技術的な効率と独立したものを確かにしている。「忙しい」という言葉は、ダンにとっていつも緊張した意味を含んでいるが、前へ前へと強引で不本意な進み方を意識してしまふ。「井戸」という名詞は、冷たい深さを暗示しているが、「脳」と共に使われることで精神のおもりのない内なる深淵を意味することになる。「煮込んだ」のような言葉の慣用的な意味は、科学的な観察を含み、その技術的な領域からでた生理学を台所へと引き込む。「生きた壁」を持つダンの蚤のように、「優しく十分に防備された感情の脳」は、柔らかくかつ遅しく生きていく。同じ動いている密度の比較は、「海綿体状」の肝臓から心臓への切り換えの中で起こる。巨大な血の固まりのような液体から形になる。

「筋肉の紐」が持つ固くて、繊維質の堅実さは、縫うように肉を刺し貫き、『葬式』や『聖遺物』の中の髪の毛や神経に近いイメージである。私たちが以前に調査したダンの決まり文句に簡単に関係しうる語句の別の特徴がある。しかし、ダン以外ではどこでこのような書き物を探すことができるのかを訊ねるとき、全くの偶然に頼るしかない。はじめて、ヒューズの『カラス』が英国文学の詩の中で『魂の発展』に匹敵しうるものとして存在する。ダンのようにヒューズは、言葉が生肉の塊みたいページの上に定着するまで自分の言葉を肉体化しようと努力する。そのとき、ヒューズが書く、

不快な坑道の中の血を汚せ

溶鉱炉の中に詰まった臓腑を汚せ

あるいは

イブの肉体の中の血は

子宮から流れ出て、

十字架の上で結び目となった。⁶⁰⁾

その結び目や溶鉱炉、それに建築材料をしゃにむに肉体の柔らかさに割り込むやり方から、私たちの精神は他の誰でもないダンに向くことになる。しかし、ダンは、ヒューズとは違って、破壊してしまふように思える危険はない。ダンは、いかなる段階でも今生きていく生き物の快さを大事にする。さらに、胎児が成長していく記述のようなダンの詩の医学的側面は、当時の医者たちの見解に密接に対応している。技術的な情報と感覚的な興奮が、互いを混ぜ合わせ強くする。

その詩もまた、水の下部門としては素晴らしい。その中で魚の生活環をその魚の受胎の瞬間から辿っている。その強調点は、群泳する本能的な形態に置かれていて、海がそれを保っている。もう一つは、魚たちが絶え間なくお互いに殺し合うやり方に向けられている。無謀で致命的ともいえる豊富さの中で、あらゆる粒子には、はかない完全性があることをダンは私たちに印象づける。

メスの魚は、砂にまみれた卵を

オスがしらこをかけて、新しく生み落とした。

遊泳しながら交尾しており、あの小さな身体の

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

一つがとても合っている。この魂が吹き込まれ、ヒレのついたオールで自らを漕ぐことができる。

魚はそれに合わせた。うろこは羊皮紙のようにみえた。

まだ、たぶん魚のようだが、それを魚と名前を

呼ぶことはできない。⁽⁶²⁾

ダンは、私たちが通常、実験室の水槽の中で孵化するものや詳細に調べるものと関連づけるべき産卵と受精の行程に疑問を呈する注意を払っている。しかし、いつものようにダンの関心は、臨床的であるが、単なる臨床というわけではない。ダンの比較は、微小の生物の危うさ（「羊皮紙」とたくましさ（「オール状の物」）の両方を詳しく述べている。魚の一生は見られるのと同時に楽しまれる。正確さと空想は、協力しあう。一方ではメスの「卵」とオスの「しらこ」との相互の関連は、対照的な構造の遊びを維持している。私たちが繰り返してきつてきたように、ダンの身体についての理解力は、集中する傾向がある。

大きさを語る別の終わり方で、ダンの描くクジラは、そこで魂が重大な宿りをするのだが、大砲の集中砲火の力を浮いているホテルの雄大さと組み合わせる。

一漕ぎごとに、クジラの真鍮製のヒレが壊れた海で

大砲の砲声よりも大きな円を描く、

そのときの大砲の音が空気をつんざく。

クジラの肋骨は柱で、帆船の高いアーチ型の屋根は

最高の鉄をも台無しにしてしまうほどで、雷も保証付き。

飲み込まれたイルカは恐れもなく泳ぎ回り、

両岸を感じないほど。まるで巨大な子宮が
内海であるかのように。⁽⁶³⁾

クジラの壮観な出現は、ダンらしい手法のあと、クジラを金属と建築物に変えることとその回りの材料を凝固させることで達成される。「壊れた海」（「筋肉の紐」あるいは「ばらばらになった骨の名前」のように混ぜ合わされた一貫性を持つ句のもう一つのもの）は、クジラが単に水というより、壊れやすい石の間の道を砕いて進まなければならぬという印象を与える。これは、動物の現実を超えている。同時に、今では私たちはダンの論理を経験することで期待してしまうように、このように濃縮したり、拡張したりすることを強調することで、クジラが攻撃に弱いこととか、クジラが発する生きた分泌物が中和されるのである。「油」が、そこから「流れ出る」。（ゆっくり漏れる感じのその動詞は、ダンがその場に応じて造ったものなのだが、明らかに二世紀も使われないでいて、知られるかぎりブラウニングが初めて『ネッド・ブラッツ』の中で使った。）そして、クジラは「殻棹状のヒレを持つオナガザメ」と「はがねの嘴をした」メカジキに殺される。

他の有名な文学に出てくる魚と比べてみると、この詩の中のダンの魚は、そのリアリズムにおいて目立っている。ミルトンの『コウマス』の魚は、発光するように美しいが、私たちの世界というより何か他の世界に属している。

あらゆる魚と共に音と海は、今や月に向かって
震えるようなモーリス・ダンスの動きで進んだ。⁽⁶⁴⁾

ダンの魚は、食べたり食べられたりするのに忙し過ぎてモーリス・ダンスをする時間がない。もう一方で、魚は、『ウインザーの森』⁽⁶⁵⁾の中のポープの魚と違って、アウグストゥス帝時代の生き生きとした描写の積み重ねによって妨げられない。魚のとても薄いうろここと砂まみれの卵は、自然に詩的であるのに対して、染めてあり金色に輝くポープの魚は、家具のように飾りがついていて、家具のように水の中では全く持ちこたえることはなかった。

しかし、ダンの『魂の発展』の中の生き物たちは自然の法則に従って本物であるが、生き物の現実には、全く幸福にその想像と潜在的に伝説化されているものとの融合がある。それは、増大する現実であり、制限された現実ではない。ダンが肉体的な洞察に興味を持ったとすれば、ダンに予想どおり気に入った一つの動物伝説は、ネズミがゾウの鼻の中に入り込み、脳を齧ってゾウを殺してしまうというのであった。これを避けるために、ゾウは一般に寝る前に鼻に結び目を作るのだという。ダンの説明は卓越していて、別のところで説明するのを私たちが見てきたように、脳から身体の各部分へ下りていく生きた「紐」になっている。ダンのネズミはゾウの鼻が結び目になっていないのを見て、真つ直ぐによじ登り、その内側に入り込む。

そこで、回廊にこのネズミが入り込み、

この巨大な家の各部屋を探し回り、

魂の寝室である脳に辿りつき、そこで

生命の線を齧った。きれいに舂まれた

町全体のように、その殺された獣は倒れ込む。⁽⁶⁶⁾

恋人たちの糸で結ばれた目と比較すると、私たちは恐ろしく刺し抜かれていた柔らかい何かを感じ、それでその柔らかさが強調される。しかし、生物体を無機化する（「明るい髪の毛の腕輪」、「はがねの嘴をしたメカジキ」）ダンの技法も、その生物体を私たちの心にさらにはっきりと刻み込むために存続する。ゾウの皮膚の下で、ネズミは「回廊」や「家」や「町」を見出す。本当にダンらしく言えば、そのネズミは生物体であるだけでなく建築物であるということになる。ダンが入り込める耳の内耳に興味を持つようになった感受性は、同様に、さらに大規模ではあるが、ここで作用する。同じく、ダンらしい表現としては、そのゾウの全体は「生命の線」という糸で纏められているという事実である。その糸は『葬式』の「筋肉の紐」のように、複雑で繊維状の結合を示している。ダンの中の肉体は、建物であると同時に網状組織が張り巡らされている。この二つの比喩が含んでいる対比される構造は、私たちに対比的ではあるが補足的に肉体的な反応を要求する。

植物の生活は、魚や動物の生活と同様に、『魂の発展』の中で著しく関わる仕方提示されている。たとえば、ダンは「ヒイラギの中で増大する粘性のある血」⁽⁶⁷⁾について書いている。その比喩によって、スズメの裸の腕の部分を突き破って生えてくる羽根のように、私たちは簡潔に自分が肉体を持って自然界を経験することができる。植物が再び影響を及ぼすのは、エデンの園で蛇がリンゴをむしり取ったときである。それは、

脆い血管、柔らかい水道管を破った。

そこを通過して、この魂は、木の根から

生命を引き出した。⁽⁶⁸⁾

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

ここで、リンゴの幹が提供する魅惑的な顕微鏡の舞台で、ダンは植物界に「血管」を持った人間の肉体と「柔らかい水道管」という壊れやすい建築素材を潜り込ませる。その建築素材は、あの蚤の生きた壁にもなったのである。木の幹が堅くて感受性を持つていることが同時に眼前に示される。

このように植物の生命に対して敏感であることは、ダンの叙情詩、宗教詩、説教集に流れているのである。ダンは春になると生ずる愛の目覚め、或いは自らの精神の脅えを表現する。季節の息吹や死ぬことを引き合いに出すことで、「世界の全ての樹液」の動きと根と蕾の中の振動はそこに恐怖や病気を生じさせる。このようなイメーヂを通して、ダンは自らを人間的な意図を越えたもつと深く暗い領域へ結びつけている。だから、「キリストへの賛美、著者たちが最後にドイツに入るときに」の凝縮した悲しみの中で、ダンは自分の人間性やその表面的であることを超えて、木々との原初的な関係に入っていることを感じる。

木の樹液は冬に地下の根を求めるように

冬に私はあなたを他誰もいない、私を知る

本当の愛、永遠の根に今、私は行く。

ロレンスと似ているところは、以前に一、二度取り上げたが、ここでは正にその証拠である。たとえば、ロレンスの場合、『エトルリア紀行』の中で植物の根を上って、木の偉大な肉体、生命の木を作り上げ、それと同時に人間の足を上って、心を作り上げる素早い力について書いている。

感覚のないものや原始的なものに向かう衝動は、ダンの詩行を支

配しているが、思索する詩人、華やかな頭脳を働かせる情報源としてのダンが考える概念と著しい対照をなしている。そして、それはその概念に現在性を与えるダンという天才の中に潜む要素との生命力溢れる対照物でもある。『愛の成長』という詩は、主題として人間の愛は、全く人間的ではなくて、生物学的な過程が作りだし、支配したのであるという発見なのである。生物学的な過程によって、愛と空や天使を結びつけ、愛と「力強く働く」太陽や成長する芝生と結びつくのである。人間の愛は、心のない自然の体系と関係がある。木が花になるように、ダンは口説いている。

優しい愛の行為は、花が木の枝に咲くように、

愛の目覚めた根から今、蕾を出す。

このような詩行の扱い方のうまさ、開いた花びらのようなものに性行為をなぞらえているからだけでなく、漠然としてはいるが男根崇拜の意識が持つ木に移されることから生じているのである。自然は目を覚まされる。左記の『キリストへの賛美』からの引用の中で「探す」という語のような「目覚めた」根、樹液に伝え、意識の痕跡を枝分かれさせる。だから、またそのとき、ダンは傷ついた魂について説教の中で語る。魂というものは、「日没の頃の花のごとく、まるで一撃を受けたみたいに、縮小し、集まって、閉じこもってしまう。」⁽⁹⁾ ダンは、花が「どんな風に見えるのか(「視覚的な美しさ」)ではなく、花がどう感じたのかを伝えている。ダンは、人間性を自然界に溶け込ませ、自然界を精神の光に向けて生き返らせることで、融合を達成するのである。

この融合は、見てきたように、『魂の発展』の中で最も大規模に勝

ち誇るように扱われる。その詩は、過敏に反応をする動物学と植物学の集合体である。動物園や水族館と妊婦病棟が一つになったようなものである。その中に含まれる人間化した植物は、ついにマンドレークになる。あの伝説の根は、引き抜かれるとき人間のように悲鳴を上げる。そしてあらゆるダンのマンドレークの中でもこれは、最もすばらしいものである。その魂は、詩が私たちに伝えるように、「暗くはつきりしない場」の中でマンドレークを見出す。地球の「穴」を通じてその植物の身体の中に浸透する。

その植物は、このように能力があり、自らに向かって

押し進んだ。何処にも無かった場所。自然の行程によつて水か

ら出る空気のように、水はより太い身体から

消え去る。この正に群がった根によつて

魂の海面状の監獄は自らに成長する場を与えた。

丁度我らの通りの中のように、人々が王様を見るために

立ち止まり、人々がとてもその通りを一杯にしているので

密告者たちがほとんど通り抜けられなかった。

植物は近くに来るとき、人々は群がり、分け入って進み、

遮る物のない行列。まるで、その時のために、

人々の丸い肉体が平らになつたみたいだ。

男は右腕を東に向かって伸ばし、

左腕は西に伸ばす。両腕は十本のより細いものに

要約され、その十本が指である。

そしてベッドに身体を伸ばして眠る人のように

こんな風に男はあつちこつちに片足を投げ出した。

その足を十本の指の両足が支えている。

最初の日に毛が男の真ん中の部分に見えるように生えた。

だから愛の駆け引きで男はなお商人であるべきだし、

良くも悪くも使われるべきなのだ。

男のリング、男の葉に火をつけて、受胎の力を殺すのだ。

口があるがおし、目があるがめくら、耳があるがつんぼ

そして両肩には不思議な髪の毛が垂れている。

そこに若いコロッセの像を男は真つ直ぐに建てる。

男によつてその地面は征服されたとき、

葉で一杯の花輪を頭に載せ、小さな果物で飾られて

とても赤く輝いているので果物のために

愛の唇を白と呼んだであろう。だから、寂しい

出入りのないとりつかれた場所、この魂の第二の宿舎は、

その客が建てたもので、この生きていて埋められた人間、

この静かなマンドレークを休ませたのだ。

ダンの着想の特徴のいくつかは、孤立化されがちであるが、この素晴らしい引用文の中で結びつく。容積、圧力、密度が大きな問題として現れる。判読しにくい詩行が解き放たれるとき、読者は身体が筋肉の震えを起こしているのが分かる。マンドレークは私たちの肉体に押し入ってくる。ダンが根が押し込まれる地面を押し込まれる人間に例えることで、この効果をあげる。全体に精巧に作り上げられた群衆の場面の直喩は、エリザベス女王の個人的な外見を完備していて、それが植物の根の回りの土壌の様子を私たちに伝える唯一の目的のために紹介されている。

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

ダンが、私たちの肉体を記述的に活気あるものへと持つていこうとする努力は、第二連にも及んでいる。細い指や反り上がる爪先を使って探りを入れるマンドレークは、考えと感覚が混り合う精神の一部に到達している。その下品な毛むくじらによって、さらに感覚的に目立ちすぎ、その言葉の並べ方は共に不快感を与え、動かなくなる。たとえば、「こんな風に男はあっちこっちに」という五行目の歪められた出だしによって私たちはその文が足を伸ばしている動物のようにわき道に逸れているように感じてしまう。その上、マンドレークから伸びている糸みたいな繊維状細胞は、その上背部に下がっている陰毛とか「名状しがたい毛」、両腕の付け根の「紐」とか言われるものであるが、マンドレークと込み入っている生きた網状組織を結びつけているのである。その手段を使ってダンは、私たちが着目してきたように、有機物の細かさと結合力の両方を呼び覚ます。窓ガラスの残した引っかけ傷の輪郭のように、それが紐みたいに一緒にぶら下がっている。

さらに、そのマンドレークは、その内部に相反する性質を含んでいる。麻痺と活発、死と生という性質が、ダンの著作の中で、肉体に実質的な存在感を与えようとする。マンドレークは、「生きていく」が、「埋められて」いる。口、目、耳はあるが、話さず、見えず、聞こえないのである。目立った肉体であるが、「静か」である。人間であると同時に植物であるがゆえに、マンドレークは、この対照的な性質を特別に壮観な仕方で結合させる。そのことが部分的にダンのためにはマンドレークが持つていた魅力を説明することになる。この点でマンドレークと競うことのできる唯一の生き物は、両側が麻痺した患者である。やや後期の説教の中でダンが一人の麻痺した男に探りを入れるように注意を向けるとき、即座にマンドレー

クを思い起こす言葉を使う。「この生きていて死んでいる男、この死んで埋められた男」は、『魂の発展』の中の「この生きて埋められた男」と比較することもでき、ダンが説教の中で話すように「魂を持つているが、袋に入つたままの魂」である。その最後の表現は、生き生きとしていて、感情に溢れたものと感情を感じないものとの結合を秘めている。その結合をダンはとても面白いと思つていたのである。ダンがその説教を書いたとき、実のところ二十年ほどその表現を心の中に温めていたのである。ダンのエレジー『秋』では、すでに肉体を歳を取ると衰えていく「魂の袋」として述べている。

それで私たちは、『魂の発展』に反応してきた批評的な物わがりの悪さをどのようにすれば良いのか。グリアスンや関心のある他の批評家たちはその詩が不作法であることに単純に狼狽してしまつたことはありうることに思われる。第四十一から四連にかけてのオオカミと犬や第四十六から九連にかけての「おもちゃの猿」が少女を愛撫するような組み合わせの描写は、お上品な人を怒らせたかもしれないことは明かである。しかし、ともかく第二の文章はダンの最も微妙で扱いの難しい事柄であつて、私たちは別の章でその問題に戻ることにする。その詩の評判が悪い理由が何であれ、初期のダンの傑作として回復し、認識されるべき時である。どうしても空想してみたい誘惑に駆られることがある。それは、もしダンが自分の詩を書き終え、それが、スペンサーの『仙人女王』以上に偉大なエリザベス朝の叙事詩として認められているようになっていたとしたなら、イギリス文学はどうなつていたであろう、ということである。スペンサーの幻想的な保守主義の代わりに、私たちはその時十七世紀の詩を正式に開始させ、来るべき詩人の手本を示すために一つの作品を持つべきであつたのである。その作品は、作品が持つ

知的な気質の中で革新的で議論好きというだけでなく、直観性と現実の世界にしっかりと結びついていることが条件である。

その作品が私たちに広げている経験の領域は、その胎児と有機的組織体を含んでいるから、詩というよりもっと通常の意味で科学の分野なのである。しかし、ダンは決してその作品が科学的事実のみに向かっていくことは赦してないのである。ダンはその感情の中に浸すのである。このようにするために、いつものようにダンには、自然を肉体的な感覚へと関連づけるのである。その結果、感情の中にその世界を同じように私たち自身の肉体だと感じるようになるのである。さらに、他の詩の中でそうするのを見てきたように、ダンは、特異な鋭敏さで、肉体の可能性が感じると同時に感じられるということを経験する状況に対応しているのである。歯茎を破って出てくる歯、ねばねばした血液、水を吸う肝臓、「忙しく働く溶鉱炉」の心臓というようなものやダンの断片的な叙事詩の中で同じように注意を向けられるものが、私たちに肉体が客観的存在であることを印象づけることになる。その心理は、詩や説教集の中で髪の毛と骨に引きつけられ、肉体の生きた意識の中に宿る情性的な素材を想像するのを楽しむが、『魂の発展』の中に訓練の基盤がある。

肉体の機能を客観的に見ることでできるのは、ダンが医学的教育を受けたという単純なことによるのである。特に、ダンは解剖学の進歩に興味を持っていた。この解剖学は、ダンが生まれる前の五十年で非常に重要な進歩を遂げていたが、アンドレアス・ウエサリウスの実験に負うところが大きかった。彼の著作『人間の身体の構造について』は一五四三年に出版された。ダンがその主題について想像を掻き立てられる魅力は、明白である。「拷問を受けた死体は、解剖

が上手くないかない」と、ダンは恋愛詩の中ではつきり述べる。歩き回るために着る感覚を持った外套としての肉体というだけでなく、解剖する標本としての肉体と見るように訓練されていた。著作の中で際立っていることは、二つの側面をダンが融合していることである。外科医のメスのようなイメージは、『比喻』の中の女性に入り込むが、その技術とその微妙さを結びつける。同様に、骨にまわりつく金髪の髪の毛の腕輪、あるいは窓ガラスに彫りつけた震える骸骨のような引っかけ文字について書くとき、ダンは生き生きと動き続ける生命と肉体の生命の無い構造を混ぜ合わせる。肉体あるいはその部分がダンの詩の中に表れるとき、いつもと言っていいほど、この二元的な見方の跡を見ることが出来る。別の例を取り上げるために、『聖列加入式』の中で参列者たちが恋人たち二人に向かつて祈るとき二人の眼について語るその言い方を考えてみるとよい。

現代の恋は激しいのに、その恋で平和を得たあなた方よ、

全世界の魂を抽出して、あなた方の眼というフラスコに

流し込み、鏡とも、覗き反射鏡ともなって、

田舎も都会も宮廷も

あなた方には全てを縮図にしてみました。

どうかあなた方の恋の手本を

天から授けて下さい。

参列者たちが選んだ比喻によって、恋人たちの眼は錬金術師の実験で使う複雑な器具へと変えられている。「魂」とか金や水銀のような元素の実体を蒸留するのに使っていた管のついたフラスコなどである。しかし、この技術的に手が込んだイメージは、二人の恋人が

お互いの眼を見つめ合い、二人の眼の中に集まっている全世界を見るとき、という純粹に信じ合っていることと一致する。読者は、自分が科学的というだけでなく情緒的にも反応しているのを発見することになる。もちろん、この肉体的な器官に調和するような反応は、T・S・エリオットが述べた思想と感情の特徴あるダン風の混ぜ合わせに関連しているが、もっと詳細に言えば、『魂の発展』を一杯にしている当時流行の生理学に関連しているということである。眼がガラスであり、同時に生きているのである。

生きている化学実験器具の別の例は、『比喩』の中でダンが女性の子宮とその温かさに注意を向ける時に出てくる。

錬金術師の使う男らしい均等な火のように

蒸留器の温かな子宮の中で地球の無価値な泥の中に

黄金の魂を吹き込むのだ

その希望を抱かせる熱を彼女の最愛の部分が携えている。⁽⁷⁶⁾

このことで私たちは、イブの子宮の中の胎児を育てる「錬金術師の均等な火」のことを思い起こす。事実、ダンが錬金術に引きつけた事柄の一つが、出産と誕生のような人間の営みに対する科学的な過程の一定の融合であった。パラケルススは、十六世紀の偉大なる偽医者、魔術師、科学者で、その著書をダンが知ることになるのだが、習慣的に金属について子宮とか精子とか胎児という言葉を使っている。パラケルスス流の宇宙では、化学反応を起こす全ての元素は、生き物である。「金属は」と、パラケルススは書いている。「水銀に戻ることができるし、水銀になることもできる。もし、金属が母親の子宮の赤ん坊のように絶え間ない熱の中に四十週も留まっている

なら、火によって再び生まれ変わり浄くなることができる。」⁽⁷⁷⁾このような説明によって、自然にダンが求めることに火を着けられ、同時に科学的な道具や生物としての人間の肉体を見たいという気持ちになった。ダンは、女性の子宮を生産装置の一部であり、希望を抱いて生きているという両方を団結させるものと見なしている。愛の巢と実験室は、共に融解するからである。

子宮と蒸留器を融合するように、ダンが火に性別を取り入れたことは、パラケルスス流である。パラケルススは「自然の火は、男性的な火、主要な動因である」と書いている。肉体の熱は、機能的にも洞察力においてもダンの化学的な想像力を刺激する。たとえば、『恍惚』の始まりで、汗で「固く結ばれた」恋人たちの手は、科学的な反応となって表れるのである。「凝結」は『金属と接着の変化に関する考察』⁽⁷⁸⁾という論文の中でパラケルススが説明する一つの化学的な結果なのである。その論文によると、一つの肉体は高温で別の個体を浸透するようになる、と述べられている。肉体の糞便に興味を持っていたからこそ、錬金術師たちが実験のために熱を手に入れるのに大便を使っているのにダンが注目したのも理解できる。パラケルススが信じていたのは、金は埋めて「定期的に人間の新鮮な小便とハトの糞を使って肥沃にすれば」量が増えるということだった。抽出、分離、注入の過程に必要な温かさも補充するために、パラケルススが勧めているのは、その反応物を含む容器は「一ヶ月間馬の糞が入るもの」⁽⁷⁹⁾でなければならぬ、ということである。ダンは、書簡詩でその理論に賛同して述べている。

なぜなら草から純粹な要素を纏めて得なければならぬとき、蒸留器を使うことで、これは嫌悪される糞便、それ

から火とか太陽でより上手に作られる。⁽⁸⁰⁾

ダンにとってこのような訴えは、解剖室の訴えのように、科学的な装置の一部に変化する中で、有機的な実体、すなわち糞尿とか肉体を捉えることになる。

このような想像をする最も明快な類似性を持つ現代作家が、オーラダス・ハックスリイである。彼はいつも人間の肉体を見ることのできる異なった見通しについて喜んで私たちに思い起こさせてくれる。『不毛の葉』の中で典型的なハックスリイと思われる博学者カラミーがその主題について、自分自身の手を見本として出しながら、感受性に富んだ一人の女性に講義する。視覚的に言えば、カラミーは、自分の手が光を遮る状態に過ぎないと述べる。しかし

手は十二の平行した世界に存在する。電荷として存在する。化学分子として、生きた細胞、人間の一部分、善悪の道具として存在するのだ。肉体と精神の両方の世界で。そしてここから明確に続けて訊ねる。この異なった存在の様式の間にはどんな関係が存在するのか。生命と化学の間には共通のものは何かあるのか。善悪と電荷の間にはどうだろう。細胞の集まりと抱擁の意識の間には？ここでその深淵が開き始めるのである。なぜならどんな関連もないからである。とにかく、人はそれを見る事が出来る。宇宙は、幾層にもなつて、はつきりと分離して宇宙のつべんに乗っているのである。⁽⁸¹⁾

一九二五年に出版されたけれど、これは一世代を興奮させた。その世代はまたかなりダンの詩にも引きつけられていたのである。その

類似点は、はつきりしているが、相違点もはつきりしている。ハックスリイは私たちに肉体が科学的な存在であることを知らせるとき、少なからず絶望的な冗談となる。楽しい十八歳のアイリーンは冷たい夜に自分が戸外にいることを知るときと同じ小説の中でさらに前の事例がある。

アイリーンは胸の上で両腕を組み、温めようと自分の身体を抱いた。不幸なことに、肉と血でできたこの襟巻えりまきは、それ自体敏感だった。アイリーンのコートは袖無しだった。むき出しの両腕の温かさが風に流れていった。周りの空気の温度が百兆度(82)にまで上昇した。

アイリーンは見方によれば、美しい女性であるが、別の同じような妥当な見方から言うと、能率の悪い温度発電器である。ハックスリイは何の豊富な目的もなしに、これに私たちの注意を引きつける。その点で、ダンとの対比が示されている。ダンの女性の「大切にす

る心」は、科学的実験に温度と関わることで、子宮から放出されていて、品位を下げることなく高められている。ダンのヴィジョンは粘着性がある。一方、ハックスリイのは断片的である。ハックスリイにとって関係のない各層に分離してまった宇宙は、ダンにとってなおパラケルススと同じく多様ではあるが、統一された組織である。目に見える形での応答と関係で満ちており、神の目によって太陽に晒されているものなのである。

ダンが肉体に対して深く関わっているのは、この第五章を通して例証されているようにダンにとってさらに深い一つの疑問を呈するこ

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

とになった。ハックスリイも推測することになったことである。精神と魂は単に肉体が機能している、あるいは機能していないことなのか。ハックスリイの『いくつもの夏が過ぎて』の中のオビスポ博士はシェリーの『ウエルツシュマーツ』が定期的な肋膜炎の結果であつたと述べている。それに、よりよい医学的な治療あつたなら、

ロマン主義の詩人たちは全て、彼らが成し遂げたような作品を書くことはできなかつた、⁽⁶⁴⁾ というのである。オビスポ博士の批評は、喜ばしい反抗についての不満以上のものを引き出すつもりはないらしい。しかし、ダンにとって他のルネサンスの思想家たちのように、

その疑問は、現実的で深刻であつた。もし、魂が肉体によるならそれは不滅ではなく、肉体が死ぬとき、死んでしまうという結論が理になつていようと思えたからである。これは、十六世紀の無神論思想の代表的な教義の一つであつた。たとえば、ピエトロ・ポポナツイが取り入れた見解であつた。一五二五年に死ぬまで、パドヴァのアヴァンギャルド学派の有名な人物であつた。ポポナツイが書いた一五一六年の『トラクタトゥス・デ・イモラルタリテ・アニマエ』は魂の不滅性を迷信として退けたのである。その本を支配者たちは、自分たちの兵隊が従順でいるようにと奨励したのである。パドヴァ風の思想は、ジャン・フェルネルのようなフランスの無神論思想家たちを通して部分的には英国に伝えられていたが、主に英国人の間では無神論の国としてのイタリアのイメージを作り上げる原因だつた。

ダンは最初、魂が肉体によって成り立っているという理論を作り上げようとしたとき、半分冗談でそれをほめかすことは十分に危険であると気づいていた。ダンの第十一番の『逆説』は「肉体の賜物は、精神のよりもよい」と論じていて、その論拠を肉体の第一に

置く。

肉体が精神を作るのだ、と私は再び言う、この精神は、理性とか哲学に暴力を振るつたり不正もしないなら、魂と混同してしまふかもしれない。そのとき、魂だと思えるものは、我々の肉体によって能力を与えられる。魂によってこうなるのではない、慈愛、節制、不屈は精神の賜物なのか。私は外科医に聞いてみたい。このようなもの原因は肉体の中にあるのか、ないのか、と。⁽⁶⁵⁾

医学的な証拠を求める気持ちは、重要である。パドヴァは、医学の中心地であつた。偉大なアラビアの医者で、魂の不滅を否定するアヴェロエスの思想によって大変影響を受けた。その問題にダンが興味を持つことは、密接にダン自身の医学的な知識と繋がっている。もちろん、ダンの時代の伝統的なガレノス医学によると、いろいろある人間の気質は、その体質の中の血液、胆汁、黒胆汁、粘液の違った組み合わせによるのである。だから、霊的な能力を単なる肉体的な症状であると説明する道を開いたのである。ダンが再び、第八番の『逆説』の中で、物質主義者の立場をとって、「我々が自分たちの性質、精神、魂を持っているのは」実に私たちが体質と肉体⁽⁶⁶⁾を持っているからなどである。

その逆説の中で、ダン自身が馬鹿にしている振りをしてその主題を和らげていた。しかし、馬鹿にしているのではない。肉体が一番であるという問題は、ダンを悩ませ続けた。ダンが結局は受け入れることが出来るようになったとはいえ、そのことがキリスト教の教義の書いてある聖書の訳に激しく影響を与えたのである。ダンは、

カトリックの神父の一人、テルトゥリアンの著作の中に肉体が大切であることを支持しているのを見出した。テルトゥリアンは、もう一人のルネサンス無神論の大御所である異端の詩人ルクレティウスのように、魂は単に肉体によるのではなく、魂自体が肉体の形態をとっている、と主張さえしてしまったのである。テルトゥリアンは、実際に魂を見たという一人の信心深い婦人を知っていた。そこで、子宮の中の一番始めの存在から生まれた魂を自覚し、発生した肉体は全ての作業の中で魂と組み合わせられる、と教えた。このように、感覚と知性は別々に作用すると考えられるのは正しくないのである。感覚を使うことは、知性を使うことである。逆もまた同じである。思想を感覚的に把握することは、T・S・エリオットや他の研究者たちがダンの詩の中に見出してはいたけれど、テルトゥリアンにとって明白なことであった。

信仰的な発展の一段階で、ダンは確かに魂が肉体とともに死ぬ、あるいは眠る（最後の審判まで墓の中に肉体とともに残っている）と信じていた。たとえダンが、聖職に就く前で正当的信仰に興味を持つてしまったために、この信仰を断念してしまったように見えたとしても、逆説の中で考えていたように、説教集の中で主張し続けたのは、魂は肉体あつてのものだし、肉体なしには適切に存在しない、ということである。ダンは、テルトゥリアンがその要点を指摘しているのを引用する。「テルトゥリアンは言っている。決して肉体という固まりと心の思いを切り放してはならない、魂がすること全ては、肉体の中で、肉体と共に、肉体によつてなされるからである。」ダンはここで述べることをほとんど言い表すことができない。むしろ、こう言うことはできる。ダンが述べる極端な立場は、ダンが受け入れざるをえなかったもつと正当なキリスト教の見解

のいくつかと和解できなかったのである。なぜなら、もし魂が、肉体の中で肉体と共に肉体によらなければ、何もしないというなら、死んで肉体の外側で生き残れない。また、復活のときに、肉体を再び使うことはできない。だが、ダンは、魂が両方ともするのであると明言した。しかし、私たちはダンが死について議論するとき見るように、ダンは心配げで控えめな仕方であること、そのことを明言したのである。肉体は物質的な存在であることのダンの集中的な反応は、詩や同じく宗教的な著作の中においても示されているが、この問題に関するダンが考えるキリスト教との衝突であつた。その問題に個人的で逸脱した傾向を与えている。

しかし、この問題との格闘から生まれた一番実りある果実は、いくら複雑で熱烈であつてもダンが考えるキリスト教の瞑想の中に見出されるのではなく、若いエリザベス・ドゥルリーの肉体について書いた『第二周年詩』からの有名な詩行の中にある。

我々は彼女の視力、彼女の純粹で雄弁な血が両頬に話しかけたことで彼女を理解した。とてもはつきりと作られているので、人は彼女の肉体が考えた、と言うかもしれない。

エリザベスの考える肉体は、ダンの創作であることははつきりしている。ダン自身が書いている。「私は再び言う。肉体が精神をつくるのである。」しかし、医学と神学の問題は、超越してしまつた。そこから一人の少女の敏感な色彩と敏感な顔のヴィジョンが起る。ダンは、この生きたイメージと活気のないイメージとを混ぜ合わせるのが普通である。それに先立つ詩行でエリザベスの流動的な肉体が金属に変えられてしまつたのである。

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

彼女は、すなわちその魂は、黄金であり、彼女の肉体は、エレクトラムであった。そして、その合金の等級をたくさん携えていた。

エレクトラムは、銀一に対して金四の合金であった。それが明るく銀色に輝いている。エリザベスの孤独に輝いている様子は、このイメージの中に捉えられる。その直喩は、問題Ⅶの釣り鐘型の女たちのように、彼女を精製し、遠い存在にする。「雄弁な血」を金属に融合することは、その純粋性を失うことなくそれを動かすのである。その金属は、肉体に変わる。その中で血は、思想のように微妙に行き来する。

だから、ダンは、肉体と精神の融合を達成する。ダンは、エリザベスの肉体を知性あるものと考ええる。ダンは、深く確立されている伝統にもかかわらずそう考えなのである。何世紀にもわたり、西欧キリスト教は、魂を肉体の囚人と見てきた。他には、籠の鳥とか糞の山に捉えられた天使など。ダンは、一つの例でこの古くさい二元論を廃する。ダンがそうするのは、それ以上に注目すべきことである。なぜなら、『第一、第二周年詩』は、いたるところで魂と肉体の伝統的な対立を力強く確証するからである。ダンに、死すべきものについての一貫性は最もなかったし、一つの考えが適切に使われたと感じたのは、やっと前半だけでなく後半でもそれを試してみても良かった。しかし、もしエリザベスの考える肉体が、詩の残りの部分と矛盾するならば、肉体は私たちが見てきたように蚤の生きた黒玉の壁や恍惚状態のあの恋人たちのくっついてしまった手と完全に調和している。

そのことに関して、ベッドフォード伯爵夫人宛の書簡詩の中で、

夫人の肉体をダンが想像する仕方に実際にとても近いのである。ダンが報告しているが、肉体は肉でできてはいない。その代わり、「柔らかなガラスの壁が彼女を覆っている」⁽⁸⁾のである。彼女は、ある種の透明な煉瓦（「鏡のような石」）⁽⁹⁾でできている。古代の大理石について書く作家たちによると、ローマ人たちがそれで寺院を建てたという。このようなファンタジーは、エリザベス・ドゥルーリーの肉体をダンが述べる最初の箇所である。同様に、固い鉱石の輝きと柔らかさを混ぜ合わせる。それで同じく伯爵夫人がエリザベス・ドゥルーリーに似ていると結論づけるのは単純なことになってしまいうだろう。ダンに現実的にどちらの女性にも関心はなかったのである。ダンに讃える詩を生み出さざるを得ないので、想像力に促されるままに女性の目を通して見ることに書く機会を捕らえている。ダンにシシリア・バルストロートが死ぬときに書いた詩の中でも同じ事をしてしている。ダンに彼女をガラスで出来た大砲（「ガラスの大砲」）であると想像している。また生き残るためには、あまりにも「透き通って」いて、「サファイアのように」⁽¹⁰⁾であると述べている。『聖列加入式』でダンが錬金術師の使うフラスコを目に見立てて書くことになった「優しいガラス」の趣向である。

しかし、エリザベスの肉体は、ベッドフォード夫人やバルストロート嬢の先に立つものである。二人ともガラス製で活気に満ちていたが、その肉体は、古いキリスト教の典型の上に築かれている。その意味で二人が究極的に言って魂の入れ物なのである。エリザベスの場合は違っている。エリザベスは、肉体で思考するからである。それは金属であるが、意識がある。従って、エリザベスの純粋で雄弁な血は知性の思慮深さに対峙するように、機能の思慮深さの生きている主張である。だが、再びD・H・ロレンスのことを思い起こ

す。ダンにはロレンスより三世紀前に存在していた。というのも冷静で抽象的で精神生活を削除し、考えを感覚的な肉体に集中させることが、ロレンスの場合、重要な目的である。『馬に乗った女』はロレンスの多くの小説のように、行為の中にその考えを示しているのである。女が逮捕したインディアンたちに裸にされ、油を塗られ、マッサージされることで、女は自分が持っているヨーロッパ化された知性をはぎ取られるのを発見する。

褐色の手は信じられないほど力強いのに柔らかかった。女の理解を超えた水みたいな柔らかさ、。女の手足、肉体、骨が、ついに拡散していつてバラ色の霞の中に溶けているように思えた。そこで女の意識は輝く雲の中にきらめく太陽光線のように空中に漂っていた。⁹⁴

ロレンスの描く女は、エリザベスのように鈍化していて、意識する肉体を必要としている。

この章では、ダンが肉体をどう見ているかを観察してきて、ダン自身が二つの矛盾した仕方で見ていることに注目している。一つには、肉体が物として独立したものであり、解剖学者の眼で冷静に見ていることである。もう一つは、肉体が機能的に基づいた感覚を持っているとダンが感じていることである。一方の見方は、肉体が構成体の一つだという考えであるし、もう一方は、肉体が意識を持った生き物であるという認識である。ダンはこの二つの対立する見方を繰り返し独特の工夫をこらして融合させている。このことは、ダンが思想と感情を融合させていると批評家たちが論じたがる一つ

である。思想では肉体が死んだ付属物であると考えられていて、感情では肉体が生きているものと思われてるからである。様々な要因があるからダンの恋愛詩は自己認識の雰囲気をもつのだが、その要因の一つに愛を解剖学上の枠組みに変えることが存在するのである。ダンはその身体の各部を一つずつ遠くから眺めるみたいに扱っている。「行つて、ここからぼくの心臓を取つてくれ」「僕の長くさまよった両の眼を戻してくれ」「ここでぼくは遺贈する／ぼくの両の眼はアルガスに、ぼくの舌は名声に」⁹⁵このような系統立ては、郵便を配達するのに合わせているみたいにしてその人物を論じ、組み立てを情緒に重ね合わせ、それから解剖学者のことばを人間関係に最も関わらせようとする。

他の詩でダンには自分の心臓とか黒玉より黒くて脆い恋人の心臓について話す。あるいは、自分の身体を切り開いて、「色」や「かど」のある「心臓みたいなもの」を発見する。あるいは、自分の心臓がいかにガラスのように粉々に砕け散っているかを語るとき、再び自分は自分の経験を具体化したいと思う衝動を示すのである。⁹⁶事実、自分が存在することと自分が描く愛の絶対必要な部分であるものが石化した解剖学のぎざぎざの破片になる。頑丈で潰すこともできる内なる自己を語るときだけ、ダンには十分に集中し、激烈にすることができ。同じ理由でダンには宗教的な詩の金属に向けた。ダンには神が自分の「かび」を燃やして取り除いてくれ、磁石のように自分の「鉄の心臓」を引きつけてくれると力説する。なぜなら、金属だけが切望するすさまじさを維持することができるからである。この事例でダンが女性の肉体をガラスや金属に変えたり、蚤の黒玉の壁について述べるとき、着想の転移は一致する。機能的な生命と物質の硬く、明るい世界との間の同じ変化が追求されている。

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

出発したところで終わる。しかし、目に見える世界の美しさはダンには何の意味もないというルパート・ブルックやクロフツ教授の説は、聞くべきところはあるが、不十分である。目に見える部分の奥行きは無さは、単にダンの詩が努力して存続していることとする表れなのである。ダンが人間の身体、動物、植物、動くものについて書いているとしても、ダンが努力するのは目に見える世界とは違っていた、そしてもっと深い段階に連れていくことである。すなわち、我々の目を楽しませることより我々を目覚めさせることである。そして、そこに含まれている機能的な生命と硬く、複雑な物質との両方に気づかせようとしているのである。

原注

- | | |
|--|--|
| (1) Rupert Brooke, 'John Donne', <i>Poetry and Drama</i> 1(1913), 185-8. | (11) <i>Sermosn</i> viii, 174. |
| (2) J. E. V. Crofts, 'John Donne: a Reconsideration', in <i>John Donne: A Collection of Critical Essays</i> , ed. Helen Gardner (Englewood Cliffs, N. J., 1992), 84. | (12) <i>Sermosn</i> iii, 92. |
| (3) <i>Elegies</i> , 57. | (13) <i>Sermosn</i> iii, 113. |
| (4) Traherne, <i>Centuries, Poems and Thanksgivings</i> , ed. H. M. Margoliouth (Oxford, 1958), i, 4. | (14) <i>Sermosn</i> iii, 92 and 105. |
| (5) Johnson viii, 41. | (15) <i>Sermosn</i> ii, 84; x, 80; ix, 223, 124 |
| (6) Traherne, ed. cit., i, 111. | (16) <i>Sermosn</i> i, 192. |
| (7) <i>Sermosn</i> ii, 288; x, 232-3; ii, 83; iii, 169-70, 223; ii, 78, ix, 61; ii, 197. | (17) Winfried Schleiner, <i>The Imagery of John Donne's Sermons</i> (Providence, R. I., 1970), 68-85. |
| (8) <i>Sermosn</i> vii, 359; vi, 142, 234; vii, 106; iii, 233. | (18) See D. C. Allen, 'John Donne's Knowledge of Renaissance Medicine', <i>JEGP</i> 42 (1943), 322-42. |
| (9) <i>Sermosn</i> v, 120. | (19) Grierson i, 377. |
| (10) <i>Sermosn</i> iv, 227. | (20) Baird D. Whitlock, 'The Heredity and Childhood of John Donne', <i>N&Q</i> 6 (1959), 257-62. |
| | (21) <i>Sermosn</i> iii, 236. |
| | (22) Devotions, 23 (<i>Mediation</i> IV). |
| | (23) <i>Elegies</i> , 57. |
| | (24) A. S. Brandenburg, 'The Dynamic Image in Metaphysical Poetry', <i>PMLA</i> 57 (1942), 1039-45. |
| | (25) <i>Elegies</i> , 43. |
| | (26) <i>Elegies</i> , 9. |
| | (27) <i>Paradoxes</i> , 47. |
| | (28) D. H. Lawrence, <i>The Rainbow</i> (Penguin edn., 1970), 49. |
| | (29) <i>Epithalamions</i> , 49, 167. |
| | (30) <i>Sermosn</i> v, 353. |
| | (31) <i>Elegies</i> , 90. |
| | (32) <i>Elegies</i> , 29. |

- on Donne's reputation in *John Donne, Essays in Celebration* (1972), 1-27.
- (33) *Sermons* vii, 271.
- (34) *Divine Poems*, 26 and 94.
- (35) *Elegies*, 5-6.
- (36) Wilbur Sanders, *John Donne's Poetry* (Cambridge, 1971), 40.
- (37) *Sermons* vii, 189; ix, 408.
- (38) *Epithalamions*, 6.
- (39) *Epithalamions*, 18.
- (40) *Satires*, 8.
- (41) *Elegies*, 91.
- (42) *Epithalamions*, 47.
- (43) *Satires*, 58.
- (44) *Elegies*, 64-6.
- (45) *Sermons* v, 352.
- (46) A. Quiller Couch, *Studies in Literature* (Cambridge, 1918), 131.
- (47) M. Francon, 'Un Motif de la Poesie amoureuse au X^e Vie siecle', PMLA (1941), 307-36.
- (48) *Elegies*, 53.
- (49) *Sermons* ii, 341; iii, 329; ix, 147.
- (50) D. H. Lawrence, *Mornings in Mexico and Etruscan Places* (Penguin edn., 1971), 126.
- (51) *Sermons* vii, 417.
- (52) *Sermons* viii, 224.
- (53) Grierson ii, xx.
- (54) Evelyn Hardy, *Donne: A Spirit in Conflict* (1942), 85; Bald, 123.
- (55) Simpson, 19.
- (56) For Browning's and De Quincey's comments see A. J. Smith's essay
- (57) Johnson i, 136.
- (58) *Satires*, 33-4.
- (59) Plato, *Phaedrus*, 251 C (from the translation of H. N. Fowler in the Loeb edn.).
- (60) *Satires*, 45-6.
- (61) Ted Hughes, *Crow* (1970), 13, 87.
- (62) *Satires*, 35.
- (63) *Satires*, 38-9.
- (64) Milton, *Comus*, lines 115-16.
- (65) Pope, *Windsor Forest*, lines 141-6.
- (66) *Satires*, 41.
- (67) *Satires*, 35.
- (68) *Satires*, 31.
- (69) *Divine Poems*, 49.
- (70) *Elegies*, 77; and *Sermons* iv, 310.
- (71) *Satires*, 32-3.
- (72) *Sermons* v, 69.
- (73) *Elegies*, 28.
- (74) *Elegies*, 47.
- (75) *Elegies*, 74-5.
- (76) *Elegies*, 6.
- (77) Paracelsus, *The Hermetic and Alchemical Writings*, trans. A. E. Waite (1894), i, 126.
- (78) *ibid.*, i, 304.

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

- (79) *ibid.*, i, 41
 (80) *ibid.*, i, 129; ii, 15.
 (81) *Satires*, 101.
 (82) Aldous Huxley, *Those Barren Leaves* (1925), Part V, ch. i.
 (83) *ibid.*, Part I, ch. vi.
 (84) Aldous Huxley, *After Mary a summer* (1939), Part II, ch. vi.
 (85) On Pomponazzi see George T. Buckley, *Atheism in the English Renaissance* (Chicago, 1932).
 (86) *Paradoxes*, 33.
 (87) *Paradoxes*, 23.
 (88) Tertullian, *A Treatise on the Soul*, ch. 7 and ch. 18; and *A Treatise on the Resurrection*, ch. 16, in *Ante-Nicene Christian Library*, ed. A. Roberts and J. Donaldson (Edinburgh, 1870), xv.
 (89) *Divine Poems*, xliii-xlvii.
 (90) *Sermons* iv, 358.
 (91) *Epithalamions*, 48.
 (92) *Satires*, 93, 101-2.
 (93) *Epithalamions*, 62.
 (94) D. H. Lawrence, *The Woman Who Rode Away* (Penguin edn. 1968), 76-7.
 (95) *Elegies*, 58, 30, 54.
 (96) *Elegies*, 38, 50, 51.
 (97) *Divine Poems*, 13, 31.